

第5回 広島大学附属学校園合同 研究フォーラム予稿集

— グローバル化に対応した初等・中等カリキュラムの開発 —

2015

12/25^金

10:00

15:00

受付・全体会／広島大学大学院教育学研究科 L205
分科会／広島大学大学院教育学研究科

L102,L104,K104

目 次

プログラム	1
グローバル人材に求められる資質・能力	3
広島大学副理事(附属学校・教員養成担当) 松浦 伸和	
基調講演資料	5
『グローバル社会における教育課程と学習指導』 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長 大杉 昭英先生	
分科会資料	
【基礎力】	
広島大学附属幼稚園 グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う幼児期カリキュラムの開発	15
広島大学附属小学校 グローバル人材育成と小学校英語科教育 ～外国語活動から英語科へ～	17
広島大学附属三原中学校 世界で活躍する人材育成をめざした Peace Project の取り組み ～これまでの10年を振り返って～	19
【思考力】	
広島大学附属中学校 スポーツ文化を通じた国際理解	23
広島大学附属高等学校 グローバル人材育成のためのカリキュラム開発 ―SSHを中心に―	25

広島大学附属三原小学校 社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成する評価方法の開発 ～留学生さんとの交流活動を通して～	27
---	----

広島大学附属福山高等学校 附属福山中・高における問題解決能力、批判的思考を育む新教科の取り組み	29
--	----

【社会スキル】

広島大学附属東雲小学校 グローバル人材育成における共生社会の基盤となる「協調性・柔軟性」の要素に 特化した取り組み	33
---	----

広島大学附属東雲中学校 グローバルマインドを培う東雲中学校の取り組み実績 —東雲憲章を基軸に協働的問題解決をする教育実践を通して—	34
---	----

広島大学附属三原幼稚園 幼稚園におけるグローバル人材育成をめざす留学生交流活動の開発	36
---	----

広島大学附属福山中学校 附属福山中・高におけるグローバル人材育成に向けた実践力・社会スキルの育成	38
---	----

プログラム

プログラム

<p>10:00 ～ 10:30</p> <p>教育学研究科 L205</p>	<p>全体会</p> <p>○理事・副学長挨拶 広島大学理事・副学長(教育・平和担当)坂越 正樹</p> <p>○主幹挨拶 広島大学附属学校園研究推進委員長 由井 義通(広島大学大学院教育学研究科 教授)</p> <p>○グローバル人材に求められる資質・能力 広島大学副理事(附属学校・教員養成担当) 松浦 伸和</p>
<p>10:30 ～ 12:00</p> <p>教育学研究科 L205</p>	<p>基調講演</p> <p>テーマ：『グローバル社会における教育課程と学習指導』</p> <p>講師 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長 大杉 昭英先生</p>
<p>12:00 ～ 13:00</p>	<p>昼休憩</p>
<p>13:00 ～ 15:00</p> <p>【基礎力】 教育学研究科 K104</p> <p>【思考力】 教育学研究科 L102</p>	<p>分科会</p> <p>【基礎力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学附属幼稚園 <p>発表テーマ:「グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う幼児期カリキュラムの開発」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学附属小学校 <p>発表テーマ:「グローバル人材育成と小学校英語科教育 ～外国語活動から英語科へ～」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学附属三原中学校 <p>発表テーマ:「世界で活躍する人材育成をめざした Peace Project の取り組み ～これまでの10年を振り返って～」</p> <p>【思考力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広島大学附属中学校 <p>発表テーマ:「スポーツ文化を通じた国際理解」</p>

<p>【社会スキル】 教育学研究科 L104</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広島大学附属高等学校 発表テーマ:「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発 —SSHを中心に— 」 ・ 広島大学附属三原小学校 発表テーマ:「社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成する評価方法の開発 ～留学生さんとの交流活動を通して～」 ・ 広島大学附属福山高等学校 発表テーマ:「附属福山中・高における問題解決能力、批判的思考を育む新教科の取り組み」 【社会スキル】 ・ 広島大学附属東雲小学校 発表テーマ:「グローバル人材育成における共生社会の基盤となる「協調性・柔軟性」の要素に特化した取り組み」 ・ 広島大学附属東雲中学校 発表テーマ:「グローバルマインドを培う東雲中学校の取り組み実績—東雲憲章を基軸に協働的問題解決をする教育実践を通して— 」 ・ 広島大学附属三原幼稚園 発表テーマ:「幼稚園におけるグローバル人材育成をめざす留学生交流活動の開発」 ・ 広島大学附属福山中学校 発表テーマ:「附属福山中・高におけるグローバル人材育成に向けた実践力・社会スキルの育成」
--------------------------------	---

グローバル人材に求められる資質・能力

グローバル人材に求められる資質・能力

副理事（附属学校・教員養成担当） 松浦 伸和

1. はじめに

グローバル化の波は教育界にも容赦なく押し寄せ、その対応に迫られている。国境を越えて地球規模でヒト、カネ、モノ、情報が日々高速で移動する社会、予想不確定な社会を生き抜く人材に求められる資質・能力や、それを基にして学校教育で付けるべき学力は世界中で共通化され、PISA 調査に代表されるように、統一の尺度で測定されるようになってきた。

2. グローバル人材に求められる資質・能力

グローバル人材に求められる資質・能力に関しては、教育界のみならず経済界などさまざまな分野で議論されている。

【例】グローバル人材育成推進会議 審議まとめ（H24.6）

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

それを受けて、OECD の「キー・コンピテンシー」、北米の「21 世紀型スキル」、オーストラリアの「汎用的能力」など学校教育で付けるべき資質・能力も、世界各地で検討されてきた。

その流れを受けて、わが国でも国立教育政策研究所から、左図に示した「21 世紀型能力」が提案された。

国立教育政策研究所の『社会の変化に対応する資質や能力の育成する教育課程編成の基本原則』では、いずれに分類も「言語や数、情報を扱う基礎的なリテラシーと、思考力や学び方の学びを中心とする高次認知スキル、社会や他者との関係やその中での自律に関わる社会スキルの 3 層に大別できる」とまとめているが、「21 世紀型能力」は、「思考力」、「基礎力」、「実践力」に三分している。

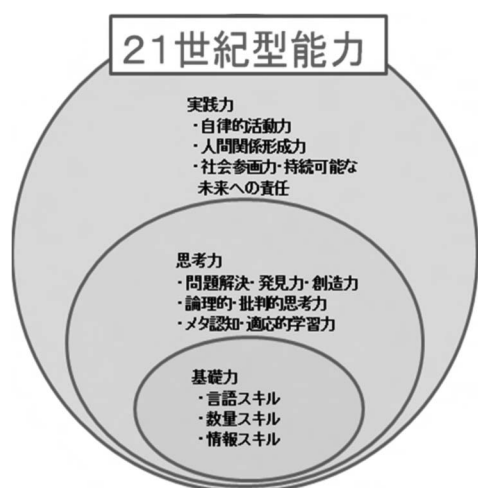


図1 「21 世紀型能力」の概念図

3. 本学附属学校園での取組

本学附属学校園は、第二期中期計画の6年間、上述した動きに合わせて、「社会のグローバル化に対応した初等・中等カリキュラムの開発」に取り組んできた。残念ながら、まだ体系的に示せるには至っていない。しかし、各学校がカリキュラムの一部に組み込まれる取組を実践している。それは以下のようになっている（主として取り組んでいるもののみを示す）。

基礎力：附属幼稚園、附属小学校、東雲中学校、三原中学校

思考力：附属中・高等学校、三原小学校、福山中・高等学校

社会スキル：東雲小学校、東雲中学校、三原幼稚園、福山中・高等学校

来年度にはカリキュラムを完成させて、その後はそれらを評価するルーブリックの作成ならびに指導法の開発を目指すことにしている。

基調講演資料

基調講演講師プロフィール

基調講演講師

おお すぎ あき ひで
大 杉 昭 英 国立教育政策研究所初等中等教育研究部長

昭和 28 年生まれ

広島県出身

昭和 54 年 広島県公立学校教員

平成元年 広島県立教育センター指導主事，広島県教育委員会事務局指導課指導主事

平成 9 年 文部省初等中等教育局中学校課／高等学校課 教科調査官

平成 13 年 国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官，文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官併任

平成 15 年 文部科学省初等中等教育局視学官

平成 19 年 岐阜大学教育学部教授

平成 25 年 4 月から国立教育政策研究所初等中等教育研究部長

グローバル社会における 教育課程と学習指導

国立教育政策研究所
大杉昭英

①

はじめに

- 1 現行学習指導要領の基底にあるもの
- 2 課題と新教育課程の検討
- 3 コンピテンシーベースのカリキュラム
- 4 コンピテンシーを育む学習指導
- 5 学習指導の検討課題

おわりに

②

授業に対する生徒の感想1

高校に入り、多様な意見があることを学んだ。
自由に意見が述べられる。自分たちで答えを考
えることができる。

授業に対する生徒の感想2

先生も自分たちも答えがない問題を話し合い、
先生が同じ目線で考えてくれる。

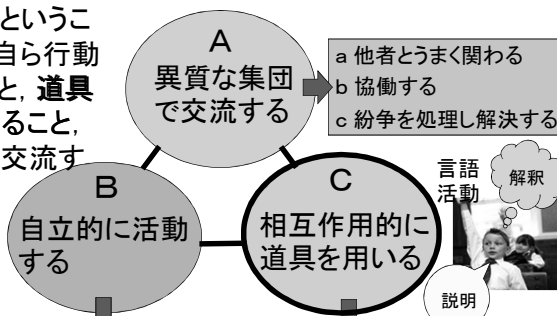
③

1 現行学習指導要領の 基底にあるもの

④

(1) キー・コンピテンシー

生きるというこ
とは、自ら行動
すること、**道具**
を用いること、
他者と交流す
ること



- a 大きな展望の中で活動する
- b 個人的プロジェクト等を設計し実行する
- c 自らの権利、利害、限界やコースを表明する

- a 言語、シンボル、テキストを相互的に用いる
- b 知識や情報を相互作用的に用いる
- c 技術を相互作用的に用いる

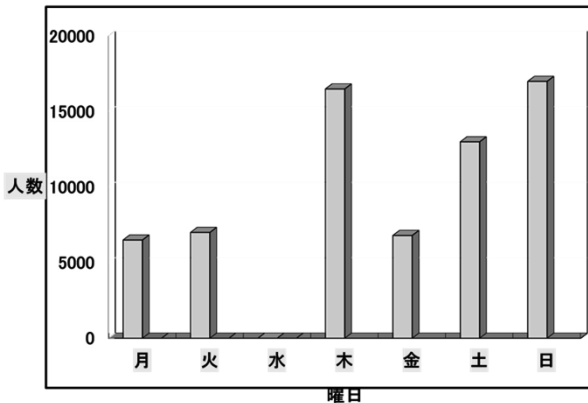
⑤

(2) PISA型読解力

- ・テキストの中の情報の取り出し
- ・テキストの意味理解(解釈)
- ・情報を知識や経験に関連付ける(熟考・評価)

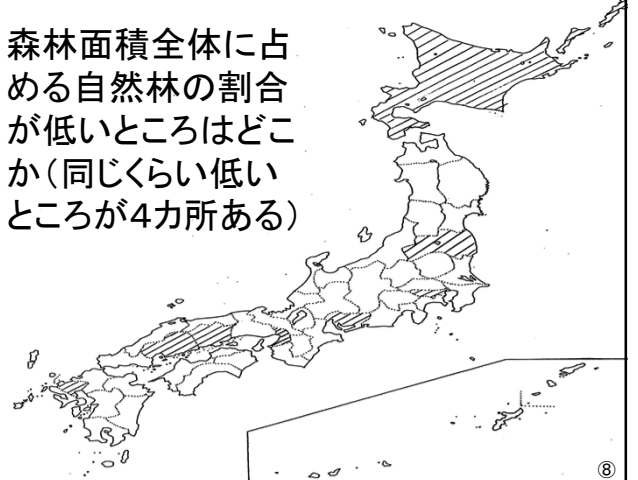
⑥

これは何を表したグラフか？



⑦

森林面積全体に占める自然林の割合が低いところはどこか(同じくらい低いところが4カ所ある)



⑧

2 課題と新教育課程の検討

⑨

(1) 課題

<資質・能力を育成するカリキュラム編成が不十分>
「現行の学習指導要領を完成した時点で、事務方には「教育内容」中心から「資質・能力」育成重視の方向へ徹底できなかった、という反省が残っていたという。とくに「資質・能力」の中身を、構造的に可視化してとらえられなかったため、学習指導要領が従来のまま作成され、「資質・能力」中心の書き方・構造にならなかったことに不満があったようである。」

(安彦忠彦「これからの子どもに育成すべき資質・能力とは」『教育展望2014年9月号』教育調査研究所2014 pp4~5)

* 文部科学省の有識者会議「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容の在り方に関する検討会」座長

⑩

(2) 教育課程の基準の検討

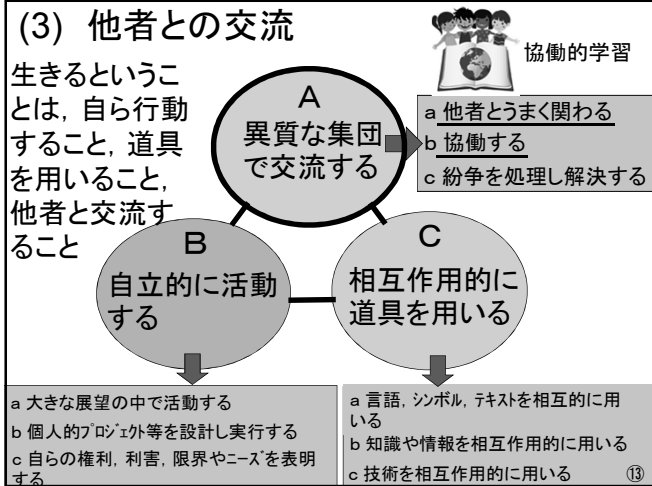
○新しい時代に必要となる資質・能力の育成に関連して、これまでも、例えば、OECDが提唱するキー・コンピテンシーの育成に関する取組や、論理的思考力や表現力、探究心等を備えた人間育成を目指す国際バカロレアのカリキュラム、ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育(ESD)などの取組が実施されています。

⑪

(2) 教育課程の基準の検討

○共通しているのは、ある事柄に関する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要であるという視点

⑫



PISA 2015 及び PISA 2018 で測定する力

3分野（数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシー）に加え、以下の能力についても調査。

1. PISA 2015

協同問題解決能力

Collaborative problem solving competency is the capacity of an individual to effectively engage in a process whereby two or more agents attempt to solve a problem by sharing the understanding and effort required to come to a solution and pooling their knowledge, skills and efforts to reach that solution.

仮訳：協同問題解決能力とは、2人以上の行為者が、問題を解決するために必要な理解や努力を共有し、その解決に至る知識・技術・努力をプールすることによって、問題を解決するプロセスに効果的に関わろうとする個人の能力。

含まれる3つのコンピテンシー

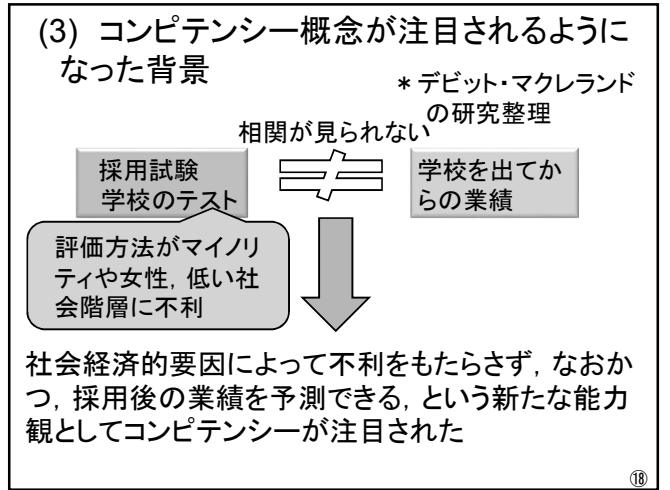
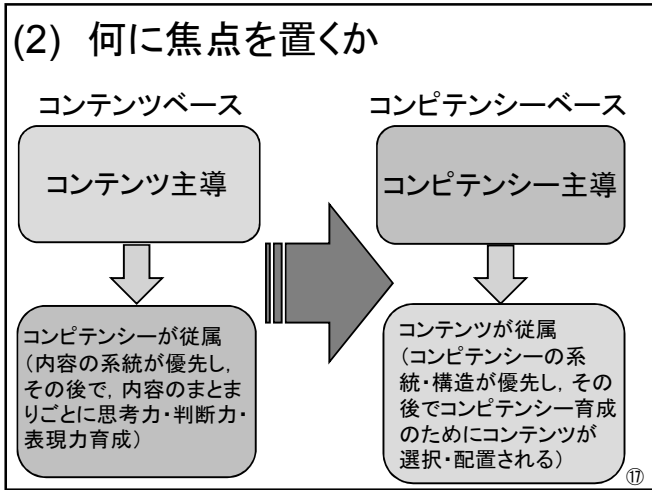
- Establishing and maintaining shared understanding; 理解の共有を確立し、維持する
- Taking appropriate action to solve the problem; 問題を解決するために適切な行動を起こす
- Establishing and maintaining team organization. チームの組織を設置し、維持する

2. PISA 2018

グローバルコンピテンシ (詳細は現在検討中)

中教審教育課程企画特別部会配付資料 (H27.5.25)
 (出典: PISA 2015 Draft Collaboration Problem Solving Framework, OECD)

3 コンピテンシーベースのカリキュラム



4 コンピテンシーを育む学習指導

19

新しい時代に必要となる資質・能力の育成に向けた教育課程の構造化 (イメージ)

中教審教育課程企画特別部会配付資料 (H27. 5. 25)

新しい時代に必要となる資質・能力の育成

◆ 自立した人間として、他者と協働しながら創造的に生きていくために必要な資質・能力
 ◆ 我が国の子供たちにとって今後重要と考えられる、何事にも主体的に取り組もうとする意欲や、多様性を尊重する態度、他者と協働するためのリーダーシップやチームワーク、コミュニケーションの能力、豊かな感性や優しさ、思いやり等

何ができるようになるか

育成すべき資質・能力を育む観点からの
学習評価の充実

何を学ぶか **どのように学ぶか**

育成すべき資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

◆ グローバル社会において不可欠な英語の能力の強化 (小学校高学年での教科化等)や、我が国の伝統的な文化に関する教育の充実
 ◆ 国家・社会の責任ある形成者として、自立して生きる力等

育成すべき資質・能力を育むための課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び (『探究・ラーニング』)

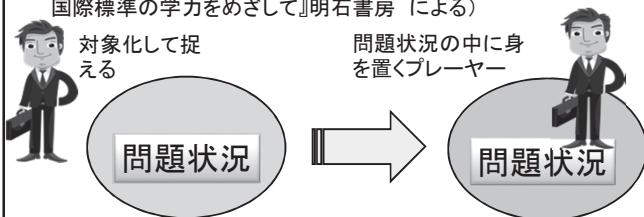
◆ ある事柄を知っているのみならず、実社会や実生活の中で知識・技能を活用しながら、自ら課題を発見し、主体的・協働的に探究し、成果等表現しているよう、学びの質や深さを重視。

20

(1) 能力は特定の文脈の中で働く (社会とのつながり重視)

【DeSeCoのキーコンピテンシー育成に対する見解】

- 「個人が単なる観客ではなく、プレイヤーである……」 (ドミニク・S・ライテン編著 立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー 国際標準の学力をめざして』明石書房 による)



(2) オーセンティック・ラーニング

www.isb.bayern.de

STATISTISCHES INSTITUT FÜR SCHRIFTLICHE UND BEWAERTUNGSPRÜFUNGEN MÜNCHEN

Telling the time

Transfer: Walk and Talk

→ Die Schülerinnen und Schüler bewegen sich frei im Klassenzimmer.
 → Sie tragen die Uhrenkärtchen wie eine Armbanduhr.
 → Sie suchen sich einen Partner und sprechen den Dialog.
 → Anschließend tauschen sie die Rollen: Der Partner beginnt nun mit der Frage.
 → Die gegenseitige Kontrolle erfolgt mithilfe der Rückseite, auf der die Uhrzeit in Ziffern steht.
 → Danach werden die Uhrenkärtchen ausgetauscht und eine neue Partnersuche beginnt.
 → Lernfortschritt: Die Schülerinnen und Schüler sprechen den Dialog zunehmend selbständiger und verwenden den Musterdialog oder die Redemittel von der Talel/Folie oder dem Plakat immer seltener bzw. je nach individuellem Bedarf.

マリエン広場で観光客に時間を聞かれたら

22

(3) グローバル人材育成の視点

【国際バカロレア】= 世界各国の大学入試資格が得られる教育プログラム

- ・コミュニケーション力・語学力(英語)
 - ・異文化に対する理解と思考の柔軟性
 - ・批評的・批判的思考力
 - ・分析的思考力
 - ・プレゼンテーション力
 - ・主体性・リーダーシップ
 - ・クリエイティブシンキング
 - ・日本人としてのアイデンティティー
- 23

(4) 国際バカロレアの必修科目

【国際バカロレア】= 世界各国の大学入試資格が得られる教育プログラム

<IBの特徴的な科目>

Extended Essay(課題論文)

- ・トピックを選び調査・研究し英文4,000字でまとめる

Theory of Knowledge

- ・分析的・批評的な考え方を習得(論文とプレゼン)

Creativity/Activity/Service

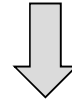
- ・創造的な活動と体の鍛錬・社会的な奉仕
- 24

5 学習指導の検討課題

25

(1) 何を教えるかという問題

コンテンツを考えずにコンピテンシーを育むことはできるのか



単なるトレーニングになるという批判

26

(2) 知識の質の問題

<論理的に考える力があるとしてよいか>

教科で学んだ知識

問題:なぜ夜は暗いのか?

生活経験から得られた知識

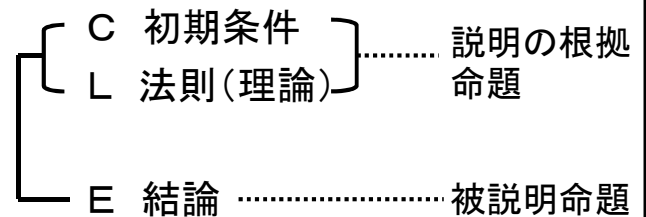
夜は空にカーテンが引かれるから暗くなるの

地球が自転し太陽の反対側になると暗くなるの



27

論理的に考える構造



C「地球が自転する」vs「空に大きなカーテンが引かれる」

L 太陽光が遮断されると暗くなる

E 夜は空が暗くなる

28

(3) 知識観の問題

<模擬裁判授業後の研究協議における意見交流から>

同じ事件を取り上げて、有罪か無罪かを評議する授業

1班(有罪)

4班(有罪)

2班(有罪)

5班(無罪)

3班(無罪)

6班(無罪)

(弁護士)

色々な意見が出て良かった。判決はいろいろあってよい!

(教員)

モヤモヤしてスッキリしない。有罪・無罪、本当はどっち!

29

(3) 知識観の問題

A 科学的实在論



人間の認識活動とは独立の世界があって、その世界はあらかじめ構造と秩序をもっており、われわれは、それを知る(発見する)ことができる。

VS

B 社会構成主義



あらかじめ世界の構造とか秩序があるのではなく、それは認識主観が構成して世界に押しつけるものであり、社会が変われば、規則性も秩序も変わる。

30

(4) 構成主義的に結論(真実)を作り出す

裁判は、訴えられたことが、本当にあったかどうかを判断する場である(=事実認定)。

○無罪推定

検察官が起訴したことがらについて、証拠(証言や物証)をもとに、合理的な疑いを入れる余地がなくなるまで有罪の立証をしなければ無罪となる

○証拠主義

推測や推理で判断するのではなく、客観的に存在する証拠で有罪かそうでないかを判断する

上記二つのルールの下で結論(真実)を作り出す

31

(5) 实在論的知識観に基づく授業づくり

【授業づくりのプロセス】

教師が教材研究を行い、事前に世界を捉える真理、理論を発見する

児童生徒に真理、理論を発見させるために、題材と発問を考える

授業の導入で、定まった答えのある「問い」を設定し、児童生徒に追求させ「答え」(真理、理論)を発見させる

児童生徒が追求しやすい題材だったか、確かに真理、理論を発見して世界を捉えることができたか評価(学習評価あるいは授業評価)する

32

(6) 社会構成主義的知識観に基づく授業づくり

【授業づくりのプロセス】

対立が生じ問題性を自覚した上で、解決すべき「問題」として設定される(客観的に問題が存在しているのではないと考える)。

定まった答えがない(解決すべき)「問題」について、生徒がコミュニケーションを通して合意を形成し、答え(真理)を構成する。

児童生徒が合意形成のプロセスを踏んで、答え(真理)を構成することができたか、答えは正当性を持っているかを評価(学習評価あるいは授業評価)する

33

おわりに

(朝日新聞2014.7.9)

教育
©edukashashi.com
次ページへ

課題解決力 国も注目
と提言した。「ポイントは何を学ぶかではなく、学んだことを生かして何をするかだ」とグリア事務局長は説明する。
決まった答えのない課題に一人ではなく、みんなで取り組む。総合学習だけでなく、教科の枠を超えて考える力を「包括的に」養う。文科省の担当者も次の指導要領のイメージをそんなふうを描く。
課題解決力を養う教育の実現への「課題」は、学校の中にある。東北スクールのある生徒がこんな話をしていた。「学校は『グローバル』を掲げているはずなのに、いざという活動をすると『そんなことやってるくらいなら勉強しろ』と言われる」
理念を建前に終わらせないためには、大学と小中高の教育、その橋渡しとなる入試の見直しを、ひとつながりで進める必要がある。
(論説委員・各務滋)

34

おわりに

すでに定まった答えのある問題を追究する学習

+

まだ定まった答えのない問題を追究する学習

35

分科会資料

分科会(基礎力)

(指導助言者)

広島大学附属学校園研究推進委員長 由井 義通

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属幼稚園長 菅村 亨

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属小学校長 深澤 広明

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

- ・ 広島大学附属幼稚園

発表テーマ: 「グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う

幼児期カリキュラムの開発」

- ・ 広島大学附属小学校

発表テーマ: 「グローバル人材育成と小学校英語科教育 ～外国語活

動から英語科へ～」

- ・ 広島大学附属三原中学校

発表テーマ: 「世界で活躍する人材育成をめざした Peace Project の

取り組み ～これまでの10年を振り返って～」

<分科会(基礎力)>

発表者：広島大学附属幼稚園・松本 信吾

テーマ：「グローバル人材に求められる資質・能力の基礎を培う幼児期カリキュラムの開発」

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員長 由井 義通(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属幼稚園長 菅村 亨(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属小学校長 深澤 広明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

(1) はじめに

広島大学附属幼稚園(以下、本園)では、グローバル人材を育成するためには、その基礎を幼児期に培う必要があるという考えに基づき、カリキュラムを検討してきた。今回、「基礎力」の区分で発表を行うが、それは21世紀型能力と言われるところの言語スキル・数量スキル・情報スキルの内容という意味でなく、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う(教育基本法)」「義務教育及びその後の教育の基礎を培う(学校教育法)」という意味での基礎であることを初めに断っておく。

(2) 「めざす子ども像」の設定

グローバル社会を生きていくためには、様々な問題を主体的に考え実践する「持続可能な社会の担い手」となることが必要である。そこで本園ではE S Dを意識したカリキュラムを作成することとした。「21世紀型能力」の提言では、これからの社会を生きる子どもたちに育てたい能力と共有させたい価値を三領域で構成している。それらは、「自律的活動力」、「人間関係形成力」、「社会参画力(持続可能な未来への責任)」である。そこで、本園のめざす子ども像を、この三領域で作成した。

広島大学附属幼稚園【めざす子ども像】

- 自分のしたいことに夢中になって取り組む、自分が大好きな子ども<自律的活動力>
- 友だちと心を通わせて遊びや生活を生み出す、友だちが大好きな子ども<人間関係形成力>
- 森でセンス・オブ・ワンダーを働かせながら生き生きと遊ぶ、自然が大好きな子ども<社会参画力>

(3) 具体的取り組み

(i) 「他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得」

人材育成の根底に必要なのは、自分に自信をもって自己発揮していく力と、他者を受け入れ共感的に生きていく力であろう。本園では、<自律的活動力>である「私は私」の心と、<人間関係形成力>である「私は私たち」の心の両面をバランスよく育むことを中心としたカリキュラムを編成し、その実践を行った。

(ii) 「豊かな自然や文化とのかかわりを通じた感動体験による感性の涵養」

本園は豊かな自然環境に恵まれており、現代社会に絶対的に不足していると言われる五感を通じた原体験を保障するカリキュラムを行った。また、グローバルティーチャー(外国籍の非常勤講師)とのかかわりを通じた異文化体験をカリキュラムに取り入れ、実践を行った。

(iii) 「野外での活動を通じた体力・身のこなしの向上」

本園は広島大学所有の陣が平山を日常的に保育活動で活用している。山際には、全身を使って遊ぶことのできる綱渡りや縄ばしごなどの手作り遊具が設置されている。一日中森で過ごす「森の日」などをカリキュラムに取り入れ、小学校以降の身体活動の基礎力となる体力や身にこなしを身につけることを目指した。

(iv) 「E S Dを意識した保育を通じた「多様性」や「循環性」「連携性」などの気づきの促し」

E S Dを意識した保育実践を行うことにより、持続可能な社会づくりの構成概念である「多様性」や「循環性」「連携性」などの概念への気づきを幼児に促していく。

(v) 「挑戦的な遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成」

現代の子どもたちは多くのことが禁止された状況の中にある。挑戦の機会を奪われることで、本来自分のもっている能力を十分発揮できないままの子どもが多く、そのことがその後の意欲や意欲やチャレンジ精神の育ちに影響を与えていることが指摘されている。本園ではそのような禁止をなるべく少なくし、子どもたちが自然に立ち向かっていく「挑戦的な遊び」を推奨したカリキュラムを作成し、保育実践を行っている。これらの実践を通して、積極性やたくましいチャレンジ精神を育むことを目指している。

2 取り組みの成果と課題

(i) 「他者とのかかわりを通じた自己肯定感・他者への信頼感の獲得」

結果：入園から2～3年間の保育を通して自己肯定感や他者への信頼感を獲得していく具体的な姿と、その過程における具体的な支援内容を紀要にまとめることができた。特に、ある子どものエピソードを縦断的に積み重ねる方法は、可視化しにくい幼児期の心の育ちを示したものとして幼児教育関係者から高い評価を頂いた。保護者アンケートにおいても、「自分が大好きな子ども、友だちが大好きな子どもに育っていますか」という質問に対し、98.7%の保護者が「大変そう思う」もしくは「そう思う」と肯定的に回答した。

成果と課題：新たに作成したカリキュラムが、＜自律的活動力＞＜人間関係形成力＞の基礎を培うことに寄与していることが示唆された。今後も引き続き、本カリキュラムをブラッシュアップしながら、継続して実践することが求められる。

(ii) 「豊かな自然や文化とのかかわりを通じた感動体験による感性の涵養」

結果：センス・オブ・ワンダーを働かせて美しさや不思議さなど様々な感情体験をしている場面をエピソードとして抽出することができ、紀要にまとめることができた。保護者アンケートにおいて、「森でセンス・オブ・ワンダーを働かせながら生き生きと遊ぶ子どもに育っていますか」という質問に対し、97.5%の保護者が「大変そう思う」もしくは「そう思う」と肯定的に回答した。同様に、「グローバル・デーの取り組みは、良いことだと思えますか」という質問に対し、95%の保護者が「大変そう思う」もしくは「そう思う」と肯定的に回答した。

成果と課題：本園の原体験を保障するカリキュラムが、豊かな感動体験を保障しており、＜社会参画力＞の一部である「豊かな感動体験による感性の涵養」に寄与している可能性が示唆された。また、グローバル・デーの取り組みも肯定的に評価された。今後は、これらの幼児の育ちをより具体的に示すことが求められる。

(iii) 「野外での活動を通じた体力・身のこなしの向上」

結果：久原他による学部・附属学校共同研究(2015)を通して、保育時間中の歩数を調査し比較したところ、本園幼児は一般的な幼稚園の幼児よりも多く歩いたり走ったりしていることが示された。また、本園卒園児の体力・運動能力を小学生の新体力テストの結果と比較したところ、小学校1年生の時点ではおおむね平均的であったが、2年生以降になってから約半数の種目で平均よりも有意に高くなっていた。

成果と課題：上の結果から、本園の森の環境を活かしたカリキュラムの保育実践は、幼児期に量的・内容的に多くの身体的活動を行うことができていることが示唆され、そのことは小学校以降にもつながり「体力・身のこなしの向上」に寄与していることが示唆され、本カリキュラムは体力面におけるグローバル人材育成の基礎としての役割を担っていることが示された。今後も本カリキュラムを継続し、具体的な調査を通じた検証を重ねることが求められる。

(iv) 「E S Dを意識した保育を通じた「多様性」や「循環性」「連携性」などの気づきの促し」

結果：持続可能な社会づくりの構成概念を踏まえた実践をエピソードとして多く抽出することができ、紀要で報告することができた。しかし、そこでの個々の育ちまでは検証することができなかった。

成果と課題：持続可能な社会づくりの構成概念を踏まえた実践を通して、幼児はE S Dの構成概念を網羅した経験を保障されていることが示唆された。しかし、個々の育ちは示し得ていないので、今後、その効果について検証するための方法を検討し育ちを分析する必要がある。

(v) 「挑戦的な遊びや活動による積極性やチャレンジ精神の育成」

結果：リスクを求める遊びを通して、よりチャレンジしていく事例をエピソードでとらえることができた。また、松本他(2015)による学部・附属学校共同研究における保護者へのアンケート調査からは、自らの子どもが本園での自然とかかわる遊びを通して、入園前よりも積極性が増しチャレンジ精神が育ってきていると感じていることが有意に示された。

成果と課題：本園の保育実践により、チャレンジする機会が保障され、「チャレンジ精神」を育成していることが示唆された。そのことは、保護者も実感をもって感じていることが明らかになった。今後も実践を継続するとともに、在園児や卒園児のチャレンジ精神やリーダーシップなどを調査する必要がある。

引用文献

- 久原有貴・関口道彦・小嶋治鈴・松本信吾・七木田敦・杉村伸一郎・中坪史典・上田毅・松尾千秋(2015)「森の幼稚園の園児および卒園児の身体活動量と体力・運動能力との関係」 学部・附属学校共同研究紀要, 43
- 松本信吾・杉村伸一郎・中坪史典・清水寿代・金岡美幸・久原有貴・堀 奈美・上山瑠津子(2015)「遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因」 学部・附属学校共同研究紀要, 43

<分科会(基礎力)>

発表者： 広島大学附属小学校 教諭 西原 美幸

テーマ： 「グローバル人材育成と小学校英語科教育 ～外国語活動から英語科へ～」

指導助言者： 広島大学附属学校園研究推進委員長 由井 義通(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属幼稚園長 菅村 亨(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属小学校長 深澤 広明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取組

2011年度4月、全ての公立小学校高学年において外国語活動がスタートし、4年が経過した。現在、学校現場では、「聞くこと・話すこと」の音声面を中心とした活動が展開されている。今後2020年をめどに、中学年で外国語活動が、高学年では教科として英語科が導入される。高学年では、週2コマ程度の授業時数が計画され、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」ことが求められている。また、アクティブ・ラーニングが全教育課程で求められ、今後、自主的・協働的な課題解決型学習は一層重視されてくる。英語教育においても、「与えられた(あるいは、自らが発見した)課題を学習者が言語能力を駆使して達成する言語活動」(今井・高島 2015)を推進していく必要がある。

言語獲得を目指した「コミュニケーション能力」育成は、これからの時代を生きる児童の資質を育成するという面からも、小学校における全人教育の役割の一端を担っていく価値のある内容である。しかしそれは、音声面や感覚が柔軟な時期から、教科としてきちんと位置付けられていかなければその実現は難しいと考える。しかも、それは、既存の教科像にとらわれず、中学校段階の教科とは違う「児童期としての教科の在り方」でなければならない。

そこで、広島大学附属小学校では、2013年から、第1～6学年に教科として「英語科」を新設し、本年度からグローバル化の視点を取り入れたカリキュラム開発と授業実践に取り組んできた。

(1) これまでの実践内容

① 「広島大学附属小学校英語科学習指導指針」を作成

② 小学校における教科「英語科」

3つの視点による単元の設定

児童にどんな力を育成するかを明確にして学習内容を単元化するために、大きく3つの視点から単元を設定した。

○ Communication : Core ○ Communication : CLIL ○ Communication : Active

③ 第3学年からの段階的な文字指導

<文字導入の仮説>

「仮説1」低学年段階での2年間の学習をふまえ、Whole Wordとして、多量の語彙を音声面でInputし、聴解能力が育成されつつある3年生から文字を取り入れ、音(音素・音韻)と結びつけた学習が可能である。

「仮説2」発音している文字全体を見てとらえる活動やアルファベットの音と文字を関連付ける活動を取り入れることによって、音韻認識力を高め、文字言語への関心や学習意欲を高めることにつながる。

④ 教科用図書取り扱い

文部科学省配付の補助教材「Hi, friends! Plus」やOxford Reading Treeシリーズ(Level 1~4)を活用して、場面設定や文脈のある文章の中で語彙や英語表現に繰り返し触れさせ、Inputを行い、Fuzoku Sheet(附属小独自で開発した単元ごとに使用した表現や物語に出現した英文をまとめたシート)を使用して、定着を図るという流れで授業を行った。音声で行った基本会話を文字プリントにして、単元末やその後のWarm Upとして音読(模擬音読)活動を行った。

⑤ CLIL 単元の開発

内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習, 以下 CLIL)とは, 単なる言語学習ではなく, 学習言語と教科内容を同時に学ばせながら, 4つの原理 (内容・言語・思考・協同) を組み合わせる教授法のひとつで, 近年ヨーロッパを中心に広く実践研究されている。

CLIL 単元では, 英語そのものだけを学ぶのではなく, 英語で何かを学ぶことで, 教室における最も自然な言語使用の機会を生み出すことが可能となる。また, 学習者の既存の知識・知的好奇心・認知力に働きかけることで学習への動機づけを高めることが可能となる。語学学習のために作られたのではない様々な教材を用いて授業を行うことによって, 学んだ教科やテーマに関する知識やスキルが獲得され, その過程で語彙や文法が学習されたり, 4技能が訓練されたり, 資料の読み取り方や話し合いの仕方等の学習スキルも習得され, さらには他の認知能力を使うために考える力が身に付くと考えられている。(笹島, 2011) そのために, 実際に児童が単語や文法をただ覚えるのではなく, 汎用的能力としての思考力を育成することができるような単元を開発した。英語の内容が初級だからといって, 扱う内容まで初級にしてしまうのではなく, 多少, 難しい単語を使うことになったとしても, その場で使いながら身に付けていくようにする。

⑥ 評価規準と評価テストの開発

各単元において, 児童に身に付けさせたい「評価規準」を設定した。各学年において年2回の定期テストとパフォーマンス・テスト (スピーチ・インタビュー・プレゼンテーション) を軸に, 単元末小テストやコミュニケーション活動への参加の様子から判断し, 評価・評定を行っている。

第1・2学年においては通常の授業での各活動の観察に加え, 学期末に1回インタビューテストを実施した。第3～6学年では, 7・1月末にペーパーテスト, 学期末に1回のインタビューテストに加え, 音読テストやスピーチ・プレゼンテーションなどのパフォーマンス評価を実施した。

ペーパーテストは, 公益財団法人日本英語検定協会の実施する児童英検を参考に作成した。主にリスニングを通しての試験で, 児童はスクリーンに提示される絵や写真を見ながら教師の出す問題を聞き取り, それらに選択して答えるものである。

2 取り組みの成果と課題

本発表で, 以下の点について, 客観的データや実際の授業の様子 (ビデオ) を用いて, 述べさせていただく。

(1) 意識調査

- ① 英語に対する情意面での調査 (学年比較)

(2) 客観的調査

- ① 文字の認識
- ② 音韻の認識
- ③ 語順の認識
- ④ 英語検定合格率

(3) 考察

- ① 児童の情意面における効果
- ② 児童の「読むこと」「書くこと」における効果
- ③ 「英語理解・英語表現の能力」における効果
- ④ 語順感覚育成や文構造への気づきにおける効果

(4) 課題

- ① 教科「外国語」における評価の在り方 (3つの資質・能力との関連)
- ② 小中高を通じた12年間を見通した Can Do リストの作成

【参考文献】 今井典子 高島英幸(2015)『小・中・高等学校における学習段階に応じた英語の課題解決型言語活動: 自律する言語使用者の育成』東京書籍

<分科会(基礎力)>

発 表 者：附属三原中学校・松尾砂織

テ ー マ：「世界で活躍する人材育成をめざした Peace Project の取り組み
～これまでの10年を振り返って～」

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員長 由井 義通(広島大学大学院教育学研究科 教授)
広島大学附属幼稚園長 菅村 亨(広島大学大学院教育学研究科 教授)
広島大学附属小学校長 深澤 広明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

ピース・プロジェクトの目的は、外国から訪問される方たちに中学生が平和記念公園と公園内慰霊碑及び周辺施設を英語でガイドすることを通して、平和について考え、自分なりの意見を持ち、自らを英語で表現しようとする技能を高めることです。また、外国の人たちと積極的にかかわり、外国との文化や考え方の違いを理解しながら、相手の立場に立ったコミュニケーションができるような世界に活躍する人材育成をねらいとして、希望(のぞみ)の時間に位置づけられています。本プロジェクトが始まったのは平成16(2004)年秋のことでした。当初は「エスコート・プロジェクト」という名でスタートしましたが、2015年に名前を「ピース・プロジェクト」へと変更し、平和に対する考え方を世界に向けて発信できる力を育てたいと考えています。

附属三原中学校は、広島大学の附属学校として、コミュニケーション学習を中心とした平和学習を7年生(中学校1年次)から希望(のぞみ)の時間において進めています。その中では、他国の人々とコミュニケーションを図る中で、自身の考えを深め、表現しようする態度も育てることをねらっています。広島には世界遺産となっている原爆ドームや平和記念公園ならびに平和記念資料館など世界平和について考える環境が揃っており、ピース・プロジェクトは、まさに70年前の惨状を見ていた場所で行われます。

次に、ピース・プロジェクトの取り組みのうち、課外活動で行う内容を①～⑨に示します。また、図1は、①～⑨に即して2012年に実施した際の生徒の様子です。

- ① 生徒は、先生方よりも少し早い時間帯に平和記念公園に到着するので、プロジェクトを始める前に班で計画した平和記念公園内のガイドコースの下見をしながら、最終確認をします。先方との約束の場所は、原爆ドーム前にしているのので、そこで外国の方々との出会い、自己紹介を行います。
- ② 班ごと(4人一組)で食事会場へ移動します。食に関する配慮をするために、外国の方々には食に関する事前調査を行い、子どもが事前に予約をした食事会場で昼食をとります。
- ③それぞれの食事会場で会話をしながら昼食をとり、お互いの関係を深めていきます。
※事前指導として、「子ども同士も英語で会話をすること」とし、相手の立場に立ったコミュニケーションの在り方を考えさせておき、当日は実践させます。
- ④昼食後、班ごとに原爆ドーム前に集合し、平和記念公園内の碑めぐりを行います。
- ⑤全員が先生方とともに平和記念資料館へ入館し、班ごとに見学をします。
- ⑥「平和」についての考えを述べ合うなど、班ごとにグループ討議をします。ここで、まとまった時間をとり、平和に対する考えを交流します。
- ⑦生徒は、一日一緒に過ごした先生に対して、色紙をプレゼンとします。この色紙には、「平和」に対する生徒一人一人の考えを書き、出会いに対する感謝の気持ちを込めます。
- ⑧班ごとに平和について話し合ったあとは、全体で交流をするために、全員で平和集会を行います。平和集会の進行は、生徒で組織した実行委員が運営します。使用する言語は英語と日本語を扱うので、事前に実行委員の指導を授業とは別に行います。
- ⑨平和集会の最後に、歌に思いを込めて合唱をします。ここでは先生も一緒に歌えるような英語の歌を選んだり、日本らしい曲を選んだりします。最後は、全体で写真を撮り、班ごとに記念撮影をしてお別れをします。

図1 ピース・プロジェクト実施中の生徒の様子（平成24年6月26日）

		
①ウェルカムボードで名前を提示	②予約していた昼食会場へ移動	③グループごとに楽しい昼食
		
④平和の子の像を説明中	⑤平和記念資料館内でも説明	⑥グループで平和に対する意見交流
		
⑦平和に対する個々のメッセージ	⑧全体で平和集会を持ち意見交流	⑨最後はグループごとにお別れ

2 取り組みの成果と課題

本取り組みの成果は、過去13年に渡って、一年も途切れることなく本プロジェクトが実施できたことです。本プロジェクトを実施するためには、プロジェクトへの参加可能な相手探しとコンタクトパーソンとの連携が不可欠です。しかも、学校独自でプロジェクトに参加していただける海外の訪問団を探すのは困難です。そこで、附属学校の利点を生かして、広島大学のグローバルパートナーシップスクールセンター（GPSC）、留学生センター、米日財団など様々な方々の支援をいただいてコンタクトパーソンを紹介していただき、連携をとるよう努めてきました。コンタクトパーソンとは、本プロジェクトが始まる半年以上前からメールを介してお互いの情報（参加者名や子ども名）を共有し、プロジェクトまでに必要なやりとりを行いました。特に、課外活動においては、レストランを利用した昼食をとることにしているため、食物アレルギー、宗教上で禁じられている食べ物を考慮した昼食会場を探すことが必要であるため、生徒たちは相手の立場に立ったものの考え方をすることが必要となるとともに、文化に関する知識を持って行動することを学ぶこともできるのです。本学園が取り組んでいる希望（のぞみ）の時間の中で、本プロジェクトは9年時に設定されています。7年生の希望（のぞみ）の時間のガイダンスにて、本プロジェクトについては紹介するため、知名度が高く、何をする活動かを知っている生徒が多いのも成果と言えるでしょう。しかしながら、追跡調査などは行っていないので、本プロジェクトを学んだ生徒がその後、卒業後にどう変容したかについては、明らかにしていません。したがって、今後は本プロジェクトに限って、追跡調査などの研究も共同研究などで行って見るのもよいかと考えています。

分科会(思考力)

(指導助言者)

広島大学附属学校園研究推進委員 岩田 昌太郎

(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属中・高等学校長 竹村 信治

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属福山中・高等学校長 築道 和明

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

- ・ 広島大学附属中学校

発表テーマ: 「スポーツ文化を通じた国際理解」

- ・ 広島大学附属高等学校

発表テーマ: 「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発

—SSH を中心に— 」

- ・ 広島大学附属三原小学校

発表テーマ: 「社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成する

評価方法の開発 ～留学生さんとの交流活動を通して～ 」

- ・ 広島大学附属福山高等学校

発表テーマ: 「附属福山中・高における問題解決能力、批判的思考を

育む新教科の取り組み」

<分科会(思考力)>

発表者： 広島大学附属中学校 ・ 保健体育科 橋本 直子

テーマ：「スポーツ文化を通じた国際理解」

指導助言者： 広島大学附属学校園研究推進委員 岩田 昌太郎(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属中・高等学校長 竹村 信治(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属福山中・高等学校長 築道 和明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

本校で保健体育科が「スポーツを文化としてとらえる」をテーマに掲げ、中学校 3 年生を対象にして「教科発展型の総合学習」に取り組み始めてから 10 年以上が経過した。

ここで述べる「スポーツ文化」とは、中村敏雄の近代スポーツに対するルール学を基盤としている。中村は「スポーツ・ルール学への序章」の中で、『スポーツ・ルール学はスポーツ、武道、体操、舞踊などを人類が産み育て、発展させてきた文化遺産と捉えることによって、そこに時代、社会、民族、階級等の諸特徴とその変化や関係などが様々に刻印されていることを明らかにすることができる』と述べている。また、『スポーツ・ルール学はルールを中心に据えて考察し、その特徴、変化、関係などを明らかにすることによって、スポーツを見たり行ったりすることのなかに顕在あるいは潜在している人間の生き方を明らかにし、その批判的考察を通して、スポーツをこれまで以上に人間的な文化に変えていく方向や方法、またその実像等を明らかにしていこうとするものである。』とも述べている。

本校の保健体育科では、総合的な学習として生徒たちが日ごろ慣れ親しんでいるスポーツを取り上げながら、各スポーツが誕生した歴史や風土、用具やルールが変更されていった経緯を学ぶ機会を設けている。それぞれのスポーツがどんな地域で受け入れられ、広まっていったのか、広まっていく中でどのような変化が生じていったのか、を歴史的背景や社会情勢・民族性などから考察していくことが、スポーツに主体的に関わるという視点からスポーツ文化を捉える「学び」につながると考えているからである。同じように思われるスポーツもそのスポーツが受け入れられた地域や集団・社会情勢などによって異なり、国民の人気度や技術・戦術などにも違いが生じてくる。この時の「なぜ」「どうして」の疑問を大切にしながら、その地域や国によって異なるスポーツ文化があることを理解し、その違いを楽しみ、尊重し、さらには、自分たち自身を再度見つめ直すことができるようにすることをねらいとしている。

これまでの具体的な学習展開の一例は次の通り。

【1 時間目～4 時間目】スポーツ文化を懐疑的・批判的に捉えてみよう（教師主導型）

オリンピック・パラリンピックの開催に関連づけて、その歴史や競技人口の推移・競技種目やルールの変更が起こった経緯を紹介する。なぜ起こったのか、何が関係しているのか、ワールドカップなどの国際競技と比較して何が違うのか、疑問を投げかける。

【5 時間目～8 時間目】スポーツの素朴な疑問を考えよう（教師主導型）

生徒が日常生活の中で感じたスポーツに関する素朴な疑問を書き出してみる。その中で、各自がテーマを決定する。テーマ別に 5 つのグループに分かれ、教師との対話の中で仮説を立てながら調査手順を整理していく。

【9 時間目～夏休み期間を利用して】レポート作成（個々の生徒による調べ学習）

絞り込んだテーマについて、今回の学習で調べたい内容を整理し、仮説を立て、懐疑的・批判的に調査し、検証していく。展開法としては、①情報収集 その手段にネットで検索するのは可。ただし、最低 2 冊は本を読み、多角的に情報を得ることを奨励 ②スポーツをとりまく環境調査 歴史や誕生の経緯、経済的・政治的背景が関与していることを助言 ③キーワードになる事件や出来事・人物の発見 思わぬところでリンクする歴史的出来事やそこに登場する人物像を追調査 ④レポート作成 これまで得た個々の情報を線で結び、図にしたり文章にしたりしてまとめる、といった手順で個別対応しながら学習を進めていく。この時、必要とあらば企業訪問や直接問い合わせできる窓口を確保・紹介することもある。

【夏休み明け～13 時間】調べた情報を共有しよう（グループ学習・発表）

グループ内で調べた内容を吟味し、意見交換しながら新たな疑問に対して追跡調査を行う。最終的には一人 3 分以内で自分の調査内容について発表し、互いの学びの共有を図る。

2 取り組みの成果と課題

総合的な学習をスタートした10数年前は、120人をテーマ別に3グループに分け、教員2人ずつで担当する形をとった。

第1年次は、生徒たちから出されたテーマを「オリンピックについて」・「いろいろなスポーツの発展～スポーツの歴史やルールの変化から～」・「スポーツとは～スポーツの語源・ドーピング～」の三つに分類し、個々の素朴な疑問を学習していく上で妥当なものか、研究できる中身であるかどうか吟味しながら更にテーマを絞り込み、調べ学習を進めていった。レポート完成までに生徒たちは自分なりに関連するであろう出来事を推測しながら調べ、調べていくうちに出てきた新たな疑問をまた探求していくという作業を繰り返した。これらの過程を経ていくうちに、これまでとは違った視点でスポーツを捉えることができるようになっていったことを生徒たちはレポートのまとめや自己評価の中で新たな発見として記している。一方、生徒たちの興味・関心が多岐に渡っていく中で、①研究・調査の方向性や手順を生徒に助言・示唆できる指導者の力量、②他教科との連携、③中学生レベルの書籍の入手が指導者側の課題となった。

第5年次あたりからはテーマをより細分化し、6グループを教員1人ずつで担当する形で実施した。

「古代オリンピックの歴史と競技種目」グループでは、当時の競技種目を再現して体験することで、当時の陸上競技の技術と現在との違いに驚く生徒、これらの競技が開催された背景にある社会制度について関心を示す生徒が出てきた。「ルールについて」グループではアメリカ生まれのスポーツ（バスケットボール）とイギリス生まれのスポーツ（サッカー）の誕生当時のルールを翻訳して、日本にはそぐわないルールの存在に違う文化を持つ国や地域で同じスポーツを広めていくことへの疑問を感じる生徒が出てきた。また、「用具について」グループでは球体の不思議に着目し、数学科や用具開発に携わる企業の協力を仰ぎながらサッカーボールの正多面体の組み合わせについて考察していく生徒もいた。この頃の生徒の感想に、「今ある競技がどのようにしてできたのか、テレビの見方が変わった。」「競馬中継を見ていると戦車レースを思い出した。」「スポーツに政治的なことが介入してはいけないと思う。お金が動くスポーツに政治的なしごみを感じた。」「女性がいろいろな大会に参加できるようになったのは歴史的には割と最近なんだと驚いた。」などの記述がみられる。このように「する」スポーツに偏りがちな関心事が別の視点から「観る」スポーツへも広がっている傾向が感じられる。さらには、自分が新たに得た知識や発見を一家団欒の場で話題にして紹介する生徒も出てきており、テーマを焦点化して学習を進めていく中で、物事の考え方・捉え方がより広がりや深まりをみせてきたことを確認した。調査・探求の段階でいろいろな他教科との連携の重要性が増す中、自分の思いを他者へ伝える力を習得させることもグローバル人材の育成には不可欠な要素であるため、国語科との連携の必要性が課題となってきた。

今年度は、2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックをキーワードに決定までの世界的国家戦略、都市開催であるオリンピック・パラリンピックが国家体制へと移行していった背景など、これまで当然と捉えてきたことを新たに「なぜ」「どうして」と問いを投げかけることによって物事を懐疑的に考えることへと導いた。また、サッカー・テニス・野球などのワールドカップをテーマに挙げながら開催都市や歴史・参加国数などを比較して考えたり、障がい者スポーツの一つとして「アンパティサッカー」を紹介したりすることで、いろいろなスポーツと比較させ、なぜ、どこに違いがあるのかを推測させながら調査手順についての理解を図った。この教師主導型の全体オリエンテーションの時間は、その後の生徒個々の調べ学習を進めていく上でも、着眼点を明確にして研究・調査手順を考えさせていくのに有効であった。

また、「アンパティサッカー」の紹介は、パラリンピックへの関心を高めることにつながり、生徒の中には、障がいがあるなしに関係なく、みんなが参加できるニュースポーツを考案しようとした者も出てきた。ただ、調べれば調べるほど「障がい」の定義につまずき、悩まされ、レポートには「ニュースポーツを作り出すのは難しい。」の言葉で締めくくられ、未完成に終わってしまった。テーマ設定の段階で、他教科のみならず、クラス担任などとの連携も必要であることが想定される事案であった。指導者側が十分に研究の方向性と手順を示唆できなかったことを反省するとともに、生徒の純粋な発想を大切にしながらこの取り組み経過こそ、「スポーツ文化享受の主体者」として「それぞれの違いを理解し、違いあることを楽しみ、互いを尊重する中で、自分自身を見つめる」ことができる人間の育成につながっていると評価し、今後とも指導力の向上をめざして尽力したい。

<分科会(思考力)>

発 表 者：広島大学附属高等学校・平松敦史

テ ー マ：「グローバル人材育成のためのカリキュラム開発 -SSH を中心に-」

指導助言者： 広島大学附属学校園研究推進委員 岩田 昌太郎(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属中・高等学校長 竹村 信治(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属福山中・高等学校長 築道 和明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

本校がこれまで組織的、継続的に取り組んできたグローバル人材育成のための教育プログラムは、主に「ユネスコスクールとしての取り組み」「スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業における海外研修」「国際性の育成」という3つの柱よりなる。

本稿では、平成15年度より文部科学省から指定を受け、研究開発に取り組んでいるSSH事業における海外研修、特に韓国との連携事業を中心に紹介する。なお、図1の太枠内がSSH事業で実施しているプログラムであり、そのうち、下線はSSコース（SSH事業での特別なカリキュラムに取り組むコースであり、第2、3学年に1クラスずつ設置）が取り組むものである。これらのプログラムは互いに関連し、学校全体・全教科・教科横断で取り組んでいる。

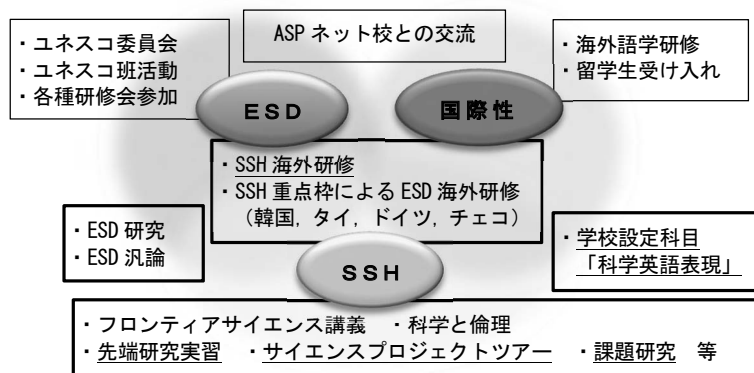


図1：本校が取り組む教育研究の概念図

(1) SSH事業における海外研修

- ① 平成21年度、SSH重点枠の指定を受け、ドイツとの連携事業
- ② 平成22年度、コアSSHの指定を受け、ドイツとの連携事業
- ③ 平成22～27年度、韓国・天安中央高等学校との連携事業
- ④ 平成25、26年度、SSH重点枠の指定を受け、韓国、タイ、チェコ、ドイツとの連携事業
- ⑤ 平成27年度、タイ・プリンセスチュラボーンスイエンスハイスクールムクダハン校との連携事業

(2) 海外研修のねらい

① ESDの視点

地球規模で生じている諸問題について、海外の高校生と定常的に連携し、科学的な調査・研究を行うことを通して、ESDの視点で思考・判断することの意義と重要性を認識させる。

② 国際的視野に基づく問題発見力、問題解決力

ア. 海外に赴き、現地の高校生と共同して科学的な調査・研究を行うことを通して、問題を発見する力や解決する力、また得られた内容を活用する力を養う。

イ. 海外の高校生と徹底的に議論することを通して、英語によるコミュニケーション力、プレゼンテーション力を伸ばさせる。

こうしたねらいを達成するために、SSH事業で実施している学校設定科目「科学英語表現（第2学年SSコースが対象）」や「ESD研究（総合的な学習の時間として実施、第2学年全員が対象）」等と連携し、ESD科学授業モデルを構築し、海外研修において実践している。

(3) 韓国・天安中央高等学校との連携事業

具体的な実践例として、平成22年度から開始し、今年度で継続6年目を迎える韓国の天安中央高等学校（韓国で科学重点校に指定）との連携事業を紹介する。



図2：SSH海外研修におけるESD科学授業モデルの特徴

① 実施時期と実施対象

訪韓研修を夏季休業中の7月下旬から8月上旬の3泊4日で、訪日研修を1月上旬の2日間で開催している。本校第2学年SSコース全員(約40名)を対象に実施しており、天安中央高等学校からは訪韓では40名、訪日では30名の生徒が参加する。

② 実施内容

主に、次のア～エの内容を実施している。なお、実施日と実施内容は平成26年度のものである。

ア. 事前学習 (訪韓研修のおよそ1週間前に、2日間に分けて実施)

7月22日	○韓国の歴史に関する学習、研修内容と関連する科学的知識・実験技能の理解と習得(本校教諭による) ○韓国の文化、言語、生活習慣に関する特別講義(外部講師招聘)
7月25日	○英語プレゼンテーション特別講義(外部講師招聘)

イ. 訪韓研修

7月28日	○移動(広島→韓国) ○開講式 ○物理・化学各領域に分かれて生徒交流
7月29日	○アイスブレイキング ○講義 ○物理・化学各領域において講義・実験・討議 ○ホームステイ
7月30日	○討議・まとめ・発表資料作成・発表 ○開講式
7月31日	移動(韓国→広島)

ウ. 訪日研修

1月13日	○開講式(高等学校第1学年全員も参加) ○講義 ○ホームステイ ○物理・化学・生物各領域に分かれて講義・実験・討議・まとめ ○各領域混合プレゼンテーショングループを再構成し各領域の実施内容の共有・討議・まとめ
1月14日	○プレゼンテーショングループでの発表資料作成・発表練習・発表 ○開講式

エ. 成果報告

年2回実施する成果報告会において参加生徒による訪韓・訪日研修の報告を行う。高等学校第1学年全員と中学校第3学年全員を対象に実施している。また、成果報告会は公開しており、SSH関係者、SSH指定校教職員、県内高等学校教職員、本校保護者、本校SSH運営指導委員・研究協力委員の参加を賜っている。

③ 海外研修において取り上げたESDテーマ

物理領域	「LED電球は環境にやさしい?!」 「家庭の消費電力を太陽電池でまかなうには？」 「風力発電を利用する」 「スターリングエンジンの熱効率」 「食品トレイを科学する」 「太陽エネルギーを科学する」 「水素エネルギーを科学する」
化学領域	「キッチンから生成したキトサンの化学的利用」 「鉄を化学する」 「バイオディーゼル」 「食品トレイを科学する」 「太陽エネルギーを科学する」 「水素エネルギーを科学する」
生物領域	「酵母によるアルコール発酵を用いたバイオエタノール生産」 「太陽エネルギーを科学する」

2 取り組みの成果と課題

事前・事後調査や訪韓・訪日での発表などから、ESDの視点で自ら思考・判断していることが伺える結果や、研修テーマについて地球規模の問題として捉え、その問題を解決するためのアイデアを提案できるなど、研修のねらいがおおむね達成されていると判断できる結果が得られている。また、英語によるコミュニケーション力やプレゼンテーション力は年々向上しており、すべてのグループで活発な意見交流や議論が行われている。これは「科学英語表現」の効果が大きい。他にも、訪韓・訪日研修で学んだことを「ESD研究」で活かすなど、SSH事業の他のプログラムとの相乗効果も得られている。さらに、生徒の感想からは「ソーラーエネルギーの活用については、韓国の生徒は私には思いつかないようなアイデアを持っていて、とても参考になりました」「エネルギー問題についてもっと国際間で協力して解決策を見つけることが大切なのではないかと考えるようになりました」など、海外の生徒と共同して取り組むことでしか得られない視野の広がりなどが見られ、グローバル人材育成に資する効果的なプログラムとして機能していると捉えている。

今年度は、MERSの影響で訪韓研修を10月に順延したものの「水素エネルギー」をテーマに例年通り実施している。実施に際しては、たとえば今年度は訪韓研修においても物理・化学各領域実施後に各領域混合プレゼンテーショングループを再構成し、各領域での実践内容を共有したうえで発表資料を作らせるなど、より効果的なプログラムとなるよう毎年改善に努めている。

今後は、こうしたSSH事業での取り組みや、ユネスコスクールとしての取り組みなど、さまざまな活動をこれまで以上により多くの生徒が共有できるようにすることが課題である。

最後に、紙幅の関係で具体的な内容を示すことはできなかったが、今年度、広島大学からの支援を得て、平成25、26年度のSSH重点枠で連携した韓国、チェコ、ドイツと継続して訪日プログラムを実施した。また、チェコとのプログラムにおいては教育実習生が参観する機会を設定した。

<分科会(思考力)>

発表者：広島大学附属三原小学校 鈴木昌二

テーマ：「社会のグローバル化に対応する資質・能力を育成する評価方法の開発

～留学生さんとの交流活動を通して～

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員 岩田 昌太郎(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属中・高等学校長 竹村 信治(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属福山中・高等学校長 築道 和明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

本学校園は、新領域「希望(のぞみ)」及び「希望(のぞみ)視点の保育」と「保育・教科」との関連を図りながら幼小中の接続期を重視した12年間一貫の自己開発型教育を開発実践することにより、社会的自立の基礎となる資質・能力及び態度・価値観の体系的な育成をめざしている。本学校園で設定している「キャリアプランニング能力」「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」の3つの資質・能力は、グローバル人材育成に向けて必要な資質・能力である「基礎力」「思考力」「社会的スキル」に通じるものであると考えられる。その中でも「思考力」に通じる「課題対応能力」の育成の取り組みに焦点化し、以下に述べていく。

今年度、5年生は新領域「希望(のぞみ)」において、単元「留学生さんとの交流」を3回計画している。以下に第1回目及び第2回目の交流会の概要を述べる。

(1) 活動の目的と目標

留学生との交流に向けての活動や交流会を通して、自分と異なる国や言語の人々を理解し、思いやることが大切であることに気づくとともに、自分にできることを見つけたり、友だちのために進んで行動したりすることができるようにする。

(2) 取り組みの内容

①第1回目の交流会(7月8日)

「留学生さんのことを知る」ことを目標にして、外国語活動で取り組んできた「What do you like?」表現を用いてコミュニケーションを図る活動を行った。インタビューで聞き取った内容は、画用紙に記入し、留学生さんのプロフィールをその場で作成していった。インタビュー活動の後には、けん玉や折り紙など、日本に昔からある遊びを紹介し、留学生さんとの交流を楽しんだ。

②第2回目の交流会(11月11日)

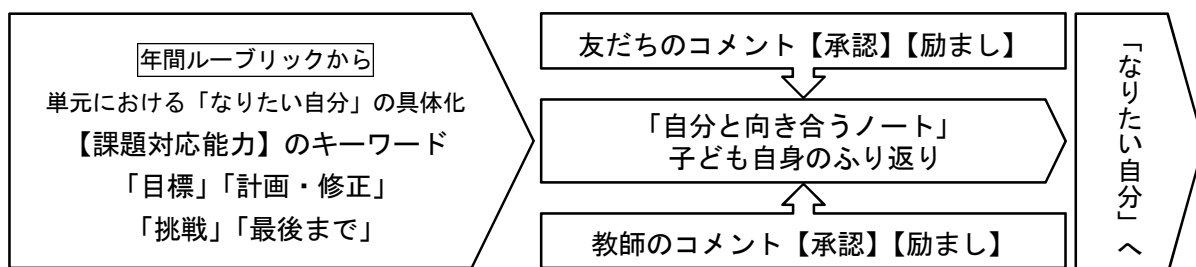
第1回目の交流の課題として、「留学生が話す英語が分からなくて困った」や「自分たちのことも紹介したい」などが挙げられた。そこで、2回目の目標を「附属三原小の1年間を紹介する」とし、グループごとにテーマを設定して、活動計画を立てて取り組んだ。あるグループは、係や委員会といった日常をテーマにして、ミニドラマを制作し披露した。また、あるグループは学校案内をしながら、それぞれの場所で行われる日常生活を説明したり再現したりしながら自分たちの学校生活を紹介した。

1回目の課題として挙がっていた「英語が分からない」に対応するために、各グループで予想される質問を考え、事前にその答えを準備していた。また、i P a dを用いて、分からない言葉をその場で調べて対応するグループもあった。もちろん、留学生さんの質問に十分答えることができたわけではないが、1回目の課題に自分たちなりの方法で対応しようとする姿が見られた。下線の活動は、「課題対応能力」育成につながった活動である。

(3) 評価方法

資質・能力を育成するためには、子どもがその資質・能力につながる自分の姿を知り、自ら意識して行動に移していく中で、その価値を実感することが重要であると考えられる。子どもが資質・能力を意識して行動できるようにするために、「自己評価活動」に重点をおいて活動に取り組んできた。まず、活動の振り返りは、「自分と向き合うノート」に毎回記述するようにした。これは新領域「希望(のぞみ)」の活動における自己評価を1年間を通して書き溜めていくことで、自己の変容を捉えていくことができるようにするノートである。そして、交流会に際して活動の最初に年間ルーブリックを基に資質・能力についての「なりたい自分」像を具体的に設定させた。さらに、子どもたちはそれぞれに設定した自分のルーブリックに基づいて振り返りを記述することで視点を明確にして自己評価活動に取り組んでいった。

毎時間のふり返りには教師がコメントを記入するようにして、めざすべき「なりたい自分」に近づいているか評価を行い、その子どもの頑張りを承認したり励ましたりした。また、同じ活動グループの友だちからもコメントをもらうことで、自分の頑張りを認めてもらえる機会を設けた。ルーブリックを基にした自己評価と他者評価を組み合わせることで、「なりたい自分」への道のりがより明確になると考える。そして、意識するだけでなく行動できる子どもへと変容させることができると考える。



2 取り組みの成果と課題

今年度、資質・能力にかかわる量的な変容を見取るための質問紙を作成し、年間を通して実施してきた。4件法で作成し、4（あてはまる）及び3（ややあてはまる）を肯定的回答とした。「課題対応能力」に関するアンケート結果は表1の通りである。

表1 児童生徒質問紙調査の肯定的回答の変容 (単位：%)

質問紙項目	4月	7月	10月	11月
「課題対応能力」平均	79	79	76	82
物事に取り組む時、計画を立てて行動することができる。	75	77	78	85
今、目標を持って頑張っていることがある。	76	75	74	78
新たに挑戦してみたいことがある。	84	83	75	84
最後まであきらめずに物事に取り組むことができる。	80	81	78	86

この結果から、今回の単元「留学生さんとの交流会Ⅱ」が「課題対応能力」の育成に効果的だったことが伺える。以下に評価に関する成果と課題を述べる。

①成果

評価に関して、年間ルーブリックを基に資質・能力についての「なりたい自分」像を具体的に設定させ、それを評価の視点として自己評価活動に取り組んだことが効果的であったと考える。めざす姿が明確であったからこそ、自己評価活動の中で、自分のできたことやできなかったことを具体的に分析でき、次の活動における具体的な行動目標を設定していくことができた。そして、そのことが資質・能力を意識するだけでなく行動することへとつながっていった。児童Aは以下のように振り返っていた。

なりたい自分	自己評価活動①	自己評価活動②	自己評価活動③	自己評価活動④
留学生から想定外の質問が出た時に、冷静に対応し、単語やジェスチャーで解ってもらえるまで挑戦する。	ジェスチャーがまだ甘い。自分たちが伝えたいことを伝えるためのジェスチャーをもっと考えて伝えやすくしていく。	質問を想定しようとしたが、それを思うように考えることができなかった。相手の立場になって想定する。	リハでは、緊張して思うように伝えることができなかった。冷静に対応できる自分に向けて、練習しないといけない。	質問は、自分で受け止めて返すことができた。間違えたかもしれないが自分から進んで対応できたことがよかった。でも、想定が甘かった部分もある。3回目に向けて、英語力を高め、どんな質問にも答えられる自分になりたい。

このように、なりたい自分に向けての自己評価活動により、主体的に自己を変容させる姿が見られた。

②課題

自己評価が非常に厳しい子どもや具体的な次の自分の姿を描けない子どももいる。仲間からの評価活動を適宜設定することや教師からの個に応じた評価を行うことを通して、自己評価の厳しい子どもに対しては自己肯定感を高めると共に、自己評価自体の質を高めていけるようにする。

<分科会(思考力)>

発表者： 広島大学附属福山中・高等学校 甲斐章義・重永和馬・川野泰崇

テーマ： 「附属福山中・高における問題解決能力、批判的思考を育む新教科の取り組み」

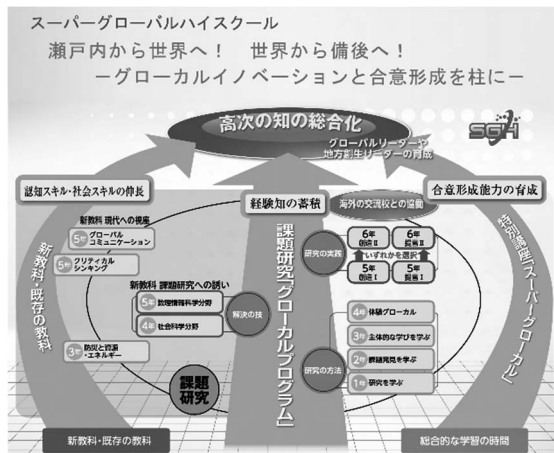
指導助言者： 広島大学附属学校園研究推進委員 岩田 昌太郎(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属中・高等学校長 竹村 信治(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属福山中・高等学校長 築道 和明(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

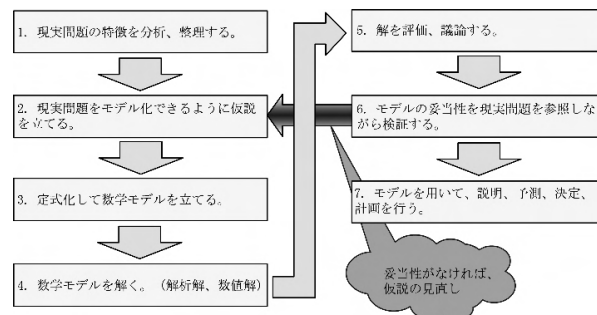
附属福山では昨年度まで研究開発校の指定を受け、ESDの構成概念を取り入れ、クリティカルシンキングに加えて「未来志向で問題解決に取り組む力」や「集団で議論し調整する力」なども主要なねらいとする教育課程を開発してきた。その特徴は「新教科 現代への視座」や「総合的な学習の時間」「既存の教科」の中で、持続可能な社会の構築のために必要なテーマや構成概念、ねらいとする能力・態度を過不足なく配置したことである。今年度からは文部科学省スーパーグローバルハイスクール（以下SGH）の指定を受け、「瀬戸内から世界へ！世界から備後へ！ーグローバルイノベーションと合意形成を柱にー」をテーマに取り組みを進めている。特に、資質・能力の面では、クリティカルシンキングを基盤にした「合意形成」能力の育成を柱に、新教科「現代への視座」や「課題研究への誘い」、「総合的な学習の時間」を中心にグローバルリーダー・地方創生リーダーの育成を目指している。目標とする生徒像は、第一にクリティカルシンキングが実践できる生徒、すなわち適切な基準や根拠に基づき、論理的で偏りのない思考をし、課題を発見し、よりよい解決に向けて地域に根ざした俯瞰的な視点から、複眼的に、より深く思考できる生徒であり、第二に問題解決の経験知を蓄積した生徒、すなわち自ら設定したグローバルな課題を、他の生徒等と情報共有し協調・協働しながら、創造的に解決する経験知を蓄積した生徒であり、第三に他者へのまなごしを体得した生徒、すなわち、自らの利益の主張だけでなく、他者への立場や状況を思い、異文化を理解し、双方が納得できる合意形成を目指して行動できる生徒である。



ここでは、具体的取り組みの例としていずれも高校2年生の新教科・科目である「課題研究への誘い・数理情報科学分野」、新教科「現代への視座・グローバルコミュニケーション」、「現代への視座・クリティカルシンキング」について説明する。

「課題研究への誘い・数理情報科学分野」では、情報の数学的な側面に焦点を当て、自然科学的な事象はもちろん社会科学的な事象をテーマに、体系的な思考を通してコンピュータを利用したアプローチを行い、問題や事象の背景を考えることを目的としている。そのため数理情報科学分野は「情報編」と「数理編」の2つの内容に分かれている。「情報編」では、問題解決の手順を学ぶことでクリティカルシンキングの手法を学ぶこととコンピュータの科学的な理解を促し、これからの情報社会を生きる上で必要な力を育むことを目的としている。また、「数理編」では、数学的側面から体系的に思考することで数学モデルを作成し、それをもとにシミュレーションを行うことで様々な事象にアプローチしていく。また、このようなモデル化の過程に沿った活動を通して問題解決を疑似体験することでクリティカルシンキングのスキルの習得を目指している。「情報編」「数理編」に共通していることは、問題解決の手法やモデル化の過程を学び実践することで、クリティカルシンキングをいかに実践していくかを疑似体験的に学び、経験知として蓄積していくことで思考力を育成していくことを目指していることである。

「現代への視座・グローバルコミュニケーション」では、海外の時事問題を題材に、多様な意見を持つ



生徒同士が連携・協力しながら英語で議論を進め、結論を導く演習を行っている。議論のトピックは、国際的な取り組みが必要な「環境問題」の他、「オレオレ詐欺の手口」、「歩きスマホの罰則化」、「タブレット端末の利用と幼児教育の是非」など、グローバル時代の現在、世界で共通してみられる社会問題を取り上げている。こうした題材を通して、諸外国の問題を身近なものとして捉え、自国が抱える同様の問題に対して自分たちはどのような取り組みをすべきか、グローバルな視点で考える活動を行っている。議論は、「トゥールミン・モデル」や「論理の誤謬」について学習を深めていきながら、自分の主張を論理的かつ効果的に伝える力の育成を目指している。また、生徒同士で提案された解決策について、「重要性」「妥当性」「信頼性」「実行可能性」「波及効果」「短期的・長期的展望」などの視点から、物事を総合的に批判・評価する力を育成していくことを目指している。

「現代への視座・クリティカルシンキング」では、現代社会をめぐる諸問題をテーマとした評論文を読み、諸問題について理解を深め、自分なりの意見や解決案を意見文として書く活動を行っている。現代社会をめぐる諸問題として、ここでは「自己・他者・言語・科学技術・環境問題・国際社会・生と死」を取り上げている。これらをテーマとした評論文を教材として取り上げ、筆者の問題提起、主張、それを支える根拠を読み解くことを通じて、問題について理解を深める。その上で、教材文を通じて得た新たな知識や、これまでの学習で得た知識を活用し、その問題について、自分なりの意見や解決案を根拠に基づいて主張する。意見や解決案を構築するにあたっては、他の生徒との交流活動を多く取り入れている。この問題を論じるにあたってはどのような根拠があるのか、どのような主張や解決案があるのか、自分とは違う知識を持っている生徒や異なる立場の生徒との交流を通じて知識を広める。これらの活動を通じて、クリティカルシンキングの育成をはかっている。

2 取り組みの成果と課題

「課題研究への誘い・数理情報科学分野」での取り組みでは、生徒は現実問題の特徴を科学的に分析・整理し、モデルの妥当性を現実問題を参照しながら検証し、さらに仮説を立て直すことについては実によく行う。例えば人口モデルを扱う際には、最初のモデルの欠点をいろいろな角度から検証し、その改善策を提案することができていた。また、新たな人口モデルからわかる社会的な変化にも気づくことができた。特にグループで協働してアイデアを出し合い、分析・整理することで一つの方向性を出す場面では、各グループとも活発に活動し、成果を出すことができた。その意味で、生徒はクリティカルシンキングを実践し、経験知として蓄積することができていた。一方で、現実問題から仮説を立て数学モデル（すなわち数式）にすることは苦手としており、現実問題をモデル化（数学化）できるように科学的視点で考えることについては課題が残った。

「現代への視座・グローバルコミュニケーション」では、「トゥールミン・モデル」を用いた演習を通じて、主張・理由・論拠の構成要素のうち特に論拠部分に対する意識が高まってきている。論拠部分の理解に苦勞している生徒もいるが、立論をするには、「主張+理由」だけでは不十分である自覚があるようで、論拠の代わりとして、理由の言い換えや詳述説明など追加情報を発信するようになった。「論理の誤謬」では、議論の中で、指導当初相手の誤謬を指摘し合う場面もみられた。議論を重ねるごとに、誤謬に対する意識が高まっていったのか、生徒が犯す誤謬の数は減少していった。最後に、多角的な視点で批判・評価する力については、妥当性や有効性、実現可能性に注意が向けられるようになってきたが、「波及効果」や「長期的展望」を考慮した発言はわずかである。継続して指導していく必要があると考える。

「現代への視座・クリティカルシンキング」の成果の一つ目として、自分が今生きている現代社会にはどのような問題があるのか理解し、それに向けて自分なりに考える態度が育ったことである。二つ目には、交流活動を通じて、積極的に他の生徒と関わり合い、知識を広めようとする態度が育ったことである。一人で意見や解決案を考えることももちろんできるが、その過程で他の生徒と関係を持つことが、新たな知識や考え方を手にすることにつながる。そのような手ごたえを得ることで、他の生徒の考えが、自分の考えの参考になることに気づき、積極的に関わろうとするようになった。課題としては、根拠が思いつかない生徒や、根拠と主張のつながりの弱い意見文を書く生徒をどのように向上させるかである。多くの生徒は根拠をもとに、説得力のある意見文を書くことができたが、苦手意識を持つ生徒がいる。この課題への対応としては、意見文以前の下書き段階での工夫と、他の生徒の書いた説得力のある意見文を読み合いすることが、大切だと考えている。

分科会(社会スキル)

(指導助言者)

広島大学附属学校園研究推進委員 影山 和也

(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属東雲小・中学校長 朝倉 淳

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属三原学校園長 三村 真弓

(広島大学大学院教育学研究科 教授)

- ・ 広島大学附属東雲小学校

発表テーマ:「グローバル人材育成における共生社会の基盤となる

「協調性・柔軟性」の要素に特化した取り組み」

- ・ 広島大学附属東雲中学校

発表テーマ:「グローバルマインドを培う東雲中学校の取り組み実績

—東雲憲章を基軸に協働的問題解決をする教育実践を通して—」

- ・ 広島大学附属三原幼稚園

発表テーマ:「幼稚園におけるグローバル人材育成をめざす留学生交

流活動の開発」

- ・ 広島大学附属福山中学校

発表テーマ:「附属福山中・高におけるグローバル人材育成に向けた

実践力・社会スキルの育成」

<分科会(社会スキル)>

発表者：広島大学附属東雲小学校 中丸敏至

テーマ：「グローバル人材育成における共生社会の基盤となる

『協調性・柔軟性』の要素に特化した取り組み」

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員 影山 和也(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属東雲小・中学校長 朝倉 淳(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属三原学校園長 三村 真弓(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

グローバル化の進む社会において、様々な国々や人々が共生関係を築く上で基盤となる「協調性・柔軟性」に着目し、これをグローバル人材に求められる能力・態度の柱としてとらえることにした(図1)。本研究では、この「協調性・柔軟性」を基に、グローバル人材育成推進会議で提言されたグローバル人材育成のための要素を効果的に育むことができるよう、以下の3点を研究の重点として取り組んだ。

- ① 既存カリキュラムのねらいの再検討と改善したねらいによる取り組み
- ② 共生社会を担う資質・能力を育むための授業開発・実践
- ③ 学校教育活動における教師の「意味づけ」や「評言」という手立ての実施

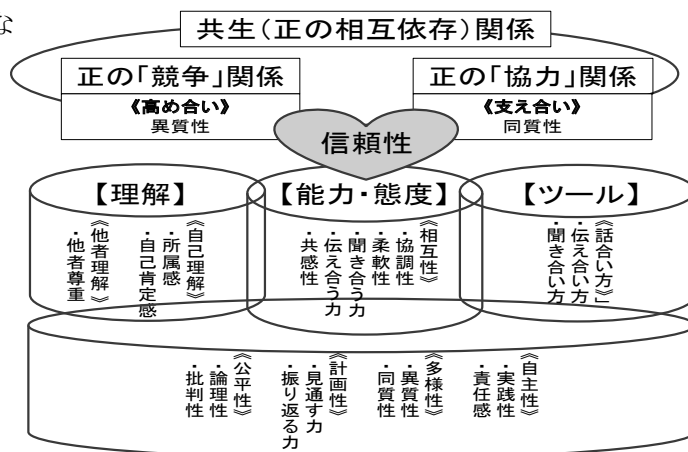


図1

2 取り組みの成果と課題

これまで本校では、3つの学級編成(単式・複式・養護)を生かし、児童相互は関わり合えるよう、様々な集団形態での活動を学校行事などで行ってきた。しかし、今回の研究を始めるにあたって、これまでの取り組みを整理検討した結果、その成果が比較的等質な集団である学級内に生かされていないことが課題として挙げられた。これは、小さな差異について認めることが難しいことに課題があると考えた。それを改善すべく国際政治学の「相互依存理論」をベースに、児童間に互いが高め合い支え合える競争・協力関係を本校の共生と定義し、本校における共生社会の実現を目指すため、その手立てを吟味し教員間の基盤形成に力点を置いて研究を継続してきている。

その結果、子どもたちが協調性や柔軟性を発揮する場として多いのは、主に「互いに支えあう場」と「互いに高めあう場」の二つであることが分かった。そこで学校行事などで行われてきた本校の特色を生かした集団活動を「共生」をフィルターにカリキュラムや目標設定の観点から再検討するとともに、学級内での児童の共生関係を築く手立てとして授業に着目し、複数の教科でそれを育む授業を開発した。

今後も共生社会を担う人材として児童に育むべき資質・能力の観点やその系統性を踏まえ、本校既存カリキュラムにおける集団活動のねらいを再検討し作成した新たなねらいの基、カリキュラムを実行していくことで、共生社会を担うための資質、能力を持続的に育成していくことが大切である。さらにいうと、この継続してきた東雲独自の教育文化についてマイナーチェンジをしながら、よりよい教育活動へと充実発展させていくことが今後の課題といえるだろう。

そして異文化理解のみならず自国内の相違、または同学年、同学級の身近な小さな差異の理解に注目した学校行事、集団的活動の取り組み、授業づくりを今後も促進していきたい。

<分科会(社会スキル)>

発 表 者：広島大学附属東雲中学校・天野秀樹

テ ー マ：「グローバルマインドを培う東雲中学校の取り組み実績

－ 東雲憲章を基軸に協働的問題解決をする教育実践を通して －

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員 影山 和也(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属東雲小・中学校長 朝倉 淳(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属三原学校園長 三村 真弓(広島大学大学院教育学研究科 教授)



1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

1-1 取り組み① ～国際交流活動

東雲中学校では、平成13年よりアメリカ合衆国ノースカロライナ州の Exploris Middle School、平成19年よりカリフォルニア州の Odyssey School、平成22年よりインドネシアの MENDOYO 第4中学校と国際交流活動を行ってきている。毎年、これら3校から生徒数名が本校を訪れ、授業交流や文化交流、ホームステイなどを行っている。また、Exploris Middle School が来校する際には Shinonome 国際ミーティング、MENDOYO 第4中学校が来校する際にはフラワーフェスティバルでのパレードを行い、特色ある国際交流を展開してきた。さらに、毎年8月には本校からも6～8名の生徒が Exploris Middle School や Odyssey School を訪問し、日米文化の共通点や相違点を学んできている。



東雲中学校の国際交流活動は、学校間の交流やホームステイなどを通じた異文化理解にとどまらず、Shinonome 国際ミーティングのように国境を越えて、それぞれの立場や状況を踏まえながら、グローバルな問題を考えていく教育活動を取り入れていることである。ここでは、質の高い異文化理解だけでなく、国際社会における日本のスタンス、ひいては、日本人としてのアイデンティティーをも必要とする。なお、昨年度より V-cube を取り入れるなど、ICT を活用した活動を促進するように実践を展開している。

1-2 取り組み② ～SMART(修学旅行を利用した取り組み)

東雲中学校では、平成25年度より「東雲中学校(Shinonome)の生徒は、自らの使命(Mission)を自覚し、問題発見したことを現地で探究(Research)し、その過程において見通しをもった行動(Action)をとる修学旅行(Tour)―SMART―を行ってきている。これは、問題を発見し、その解決に向けて見通しをもち、仲間と協働してミッションを遂行していく力の育成を図った教育プログラムである。また、この SMART は、旅行の行程を予算や安全性に考慮しながら自分たちでデザインする。したがって、必然的にプロジェクトマネジメント能力も求められる。例えば、野球部に所属するHくんは、部活動の際に手にするロジンバックの肌触りや臭いに関心を示したことから、人の体にやさしいロジンバックの開発をテーマとした。そして、紀州備長炭に着目し、仲間と協働して現地での取材をもとに新たなロジンバックの開発プランを作成するような一連の研究活動を行った。



リーダーシップ育成のための教育プログラムを実践しているシンガポールの Temasek Junior College のように東雲中学校では、グローバル社会のリーダー育成という視点をも重視している。プロジェクトマネジメント能力の育成が期待できる SMART は、グローバルマインドを培ううえで重要な位置づけとなる。

なお、SMART に関する教育プログラムは、朝倉淳ほか(2010)における新時代に協働して問題解決をする教育デザインの手法や鈴木敏恵(2006)のプロジェクト学習など、東雲中学校の教員が研修会を開催して、生徒への支援を充実させるように研鑽を重ね、その結果、できあがったプログラムである。

2 取り組みの成果と課題

2-1 取り組み① ～国際交流活動 の成果と課題

アンケート調査の結果（浜岡ほか，2011）から東雲中学校で実施する国際交流活動は，グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。また，平成26年3月に実施した Exploris Middle School 来校後に，本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「英語を話せるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒が約8割，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになることは自分にとって必要である」と回答した生徒は約9割いた。これらのことから，東雲中学校の生徒は「語学力・コミュニケーション力」の必要性を強く感じながら学校生活を送り，多くの国際交流の活動を行っている様子うかがえる。平成27年8月に Odyssey School と Exploris Middle School へ訪問した生徒へのインタビュー調査によると，「言葉に関係なく誰とでもコミュニケーションをとれるようになること」の重要性について，8名全員が「とても重要である」と回答した。このことから，実体験によりコミュニケーションの重要性を痛感している様子うかがえる。また，平成26年3月に本校生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「相手の国の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」，「日本の文化や考え方をよく知ることは自分にとって必要である」と回答した生徒は，ともに約7割いた。これらのことから，東雲中学校の生徒は国際交流活動を通して「日本文化と異文化に対する理解」の必要性を感じている様子うかがえる。



2-2 取り組み② ～SMART（修学旅行を利用した取り組み）の成果と課題

今年度の全国学力・学習状況調査の生徒質問紙において，「総合的な学習の時間では，自分で課題を立てて情報を集め整理して，調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という質問に対する結果は，次の表1のようになった。

表1 「総合的な学習の時間ではPDCAサイクルで活動しているか」（全国学力・学習状況調査）

	1（当てはまる）	2（どちらかといえば，当てはまる）	3（どちらかといえば，当てはまらない）	4（当てはまらない）
本校	59.0%	29.5%	10.3%	1.3%
全国	18.2%	39.7%	30.1%	11.8%

以上の生徒質問紙の結果から，東雲中学校で実施している SMART の活動は，普段の生活や社会に出たときに役に立つという視点において，グローバルマインドを培う一助になっていると判断できる。また，昨年度の SMART の活動後に，本校第3学年の生徒に実施したアンケート調査の結果によると，「自分の判断で行動する力に関する自信」に対して61%の生徒が肯定的な回答をした。また，「さまざまな考えを受け入れる柔軟性に関する自信」に対して62%の生徒が肯定的な回答をした。これらのことから，東雲中学校の生徒は SMART の活動を通して，「チャレンジ精神や柔軟性にかかわる自信」を高めていった様子うかがえる。

◀ 展望 ▶

東雲中学校が展開している SMART は，3年間を見通して協働して問題解決をするプログラムを設定している。また，その基軸となる精神は東雲憲章であり，タブレットを取り入れるなど ICT を活用した活動を促進するような実践や教科等との学習と相互に関連づけた実践など，今後もさらなる内容の充実をめざして本校の実践を継続していきたい。

引用・参考文献

朝倉淳ほか：問題解決の基礎的能力を育成する新時代の総合的な学習，溪水社，2010.

浜岡恵子ほか：中学校における国際交流の在り方－Exploris Middle School・Odyssey School・MENDOYO SMP4との交流を通して－，広島大学学部附属共同研究紀要第40号，59-64，2011.

鈴木敏恵：ポートフォリオ評価とコーチング手法，医学書院，2006.

<分科会(社会スキル)>

発表者：広島大学附属三原幼稚園・君岡 智央

テーマ：「幼稚園におけるグローバル人材育成をめざす留学生交流活動の開発」

指導助言者：広島大学附属学校園研究推進委員 影山 和也(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属東雲小・中学校長 朝倉 淳(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属三原学校園長 三村 真弓(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

本園ではこれまで、長く留学生交流活動を行ってきており、留学生との直接的なふれあいを楽しむことには一定の成果を得ている。しかし、うまくコミュニケーションがとれなくても自分なりのかかわり方でチャレンジしてみようとすることを意図した交流活動にまではいたっていない。したがって、「グローバル人材育成」への対応表の要素Ⅱにある主体性・積極性、チャレンジ精神を中心に社会スキルの育成に着目した留学生交流活動の開発をしていくことを目指して取り組んだ。

(1)めざす子ども像

社会スキル(主体性・積極性、チャレンジ精神)の育成に着目した留学生交流活動を開発していくにあたり、めざす子ども像を以下のように設定した。

留学生に自分からすすんでかかわったり、留学生のことを思い、自分たちなりに考えて行動したりする子ども

(2)各回交流の内容

めざす子ども像に向かっていくようにするため、以下の交流内容を計画した。

① 第1回交流(9月)【年長】

日本の遊びを中心に留学生と一緒に遊んでふれあったり、お弁当を食べたりして一緒に過ごす。

② 第2回交流(10月)【年少・年中・年長】

日本の遊びを中心に留学生と一緒に遊んでふれあったり、お弁当を食べたりして一緒に過ごす。

留学生の母国の遊びを教えてもらい、一緒にふれあって遊ぶ。

③ 第3回交流(11月)【年少・年中・年長】

留学生の母国の遊びを教えてもらい、一緒にふれあって遊ぶ。

留学生から事前に「日本の子どもたちの歌や遊びが知りたい」という話が来て、自分たちが知っている歌や手遊び、遊びなどを教えたりする。

④ 第4回交流(1月)【年少・年中】

日本の正月遊びを一緒に楽しむ。

⑤ 第5回交流(2月)【年長】

一緒に遊んだ留学生さんのために「お別れ会」を開く。

また、今年度の年長の留学生交流活動の中で社会スキルを育成するために意図的な場面を設定し、それに伴い『社会スキルが育成していると思われる具体的な姿』も設定した(表1)。

場面	社会スキルが育成していると思われる具体的な姿
日本語が通じない留学生と出会う。	① 自分たちの言葉が留学生に通じないとわかっていても、一緒に遊ぼうと思っ てすすんでかかわっている。 (主体性・積極性)
留学生が困った表情をしている。	② 留学生が困っていたら、「どうしたの？」などと尋ねながら自分からかか わっている。 (主体性・積極性)
	③ 留学生が困っていることを解決しようと自分なりに考えて行動している。 (チャレンジ精神)
言葉の違いから留学生に自分の思い	④ 自分の思いや考えなどをわかってもらうためにいろいろな方法を考え、実

や考えなどが伝わらない。	実際に試している。	(チャレンジ精神)
留学生から「日本の子どもたちの遊びや歌が知りたい」という話がある。	⑤ 「日本の子どもたちの遊びや歌が知りたい」と思っている留学生に対し、どの歌や遊びがよいか、またどうやって教えるかを自分たちで考えている。	(主体性・積極性)
	⑥ 選んだ歌や遊びを自分たちで考えた方法で教えている。	(チャレンジ精神)

表1 社会スキルを育むための場面と社会スキルが育成されていると思われる具体的な姿

(3)実践例：第2回交流(10月)【年長児】より

※下線及び番号は、表1の社会スキルが育成されていると思われる具体的な姿に対応している。

弁当を食べた後、a女、b女の二人が留学生Iさんのところにやってきて、「ねえねえ、見てて」と言い、速いテンポで『アルプス一万尺』の手遊びをやってみせている。^① 留学生のIさんが笑顔で拍手をしていると、そこへC男がやってきて「一緒にやろう!」と言って歌い始める。^② するとIさんが少し困った表情をし、首を振りながら手も振っている。どうやら『アルプス一万尺』の歌ややり方がわからないというジェスチャーのようである。C男がIさんのジェスチャーを見て不思議そうにしながら、Iさんから離れていく。一人で佇んでいるC男に教師が、「もしかしたらアルプス一万尺の手遊びがわからないのかもしれないから、教えてあげたらいいかもしれないよ」と声をかける。すると、C男が「あっ、そうか!」と言ってIさんのところに急いで戻る。そして、「アルプス一万尺、教えてあげるよ」と言い、C男がゆっくりと歌を歌いながら、Iさんの手と合わせようとする。^③ IさんもC男の手と歌のテンポに合わせている。手合わせがうまくいかない時は、Iさんの手を持って自分の手と合わせようとしている。^④ ゆっくりではあるが、手合わせを最後まで通すことができると、C男が「ほら、できた!」とIさんに話しかけ、嬉しそうに手を握っている。Iさんも嬉しそうにC男と顔を見合わせている。教師が思わず「すごい!すごい!」と声をかけると、C男が「僕が教えてあげたんだよ」と嬉しそうにしている。その後もC男はIさんに、『アルプス一万尺』の手遊びを教え続けている。

2 取り組みの成果と課題

社会スキルの育成に着目した留学生交流活動を開発したことによる成果と課題を子どもの姿から挙げる。

○成果

- ・日本語が通じない留学生に出会うことで、当初、子どもたちはとまどいを隠せなかったが、言葉が理解できなくとも徐々に聞こうとしたり、自分の思いを日本語に身振り手振りを加えて一生懸命伝えようとする姿が見られた。
- ・自分が得意としている遊びを積極的に紹介したり、「一緒にやろう」と声をかけたりする姿が見られた。この時、遊び方がわからず、留学生が困っているということを教師に教えてもらおうと、留学生にとってよい方法を自分で考えて粘り強く教える姿が見られた。
- ・「日本の子どもたちの歌や遊びが知りたい」という留学生のことを思い、初めてでもすぐに覚えられるものや日本にしかないものをみんなで考えて選ぶようとする姿が見られた。

○課題

留学生が困った表情をしている時、その状況に気づいていても自分からかわろうとする姿は見られなかった。

日本語が通じない留学生に自分の思いを身振り手振りで伝えていこうとする姿や留学生のことを思い、みんなで考える姿などはこれまで以上に多く見られた。一方で、留学生が困った表情をしている自分からかわろうとしなかったことについては、初めて出会う留学生に対する緊張やどのように対処してよいかかわらなかつたということが考えられる。今後、そのような時の援助のあり方を探っていき、子どもたちが自発的にかかわっていけるようにしていきたい。

また、今回の留学生交流活動において社会スキルが育成されていると思われる具体的な姿として、「自分の思いや考えなどをわかってもらうためにいろいろな方法を考え、実際に試している」を設定したが、子どもたちにとっては留学生に自分の思いをわかってもらうために、日本語に身振り手振りを交えて伝えていくだけで精一杯であった。こうした方法以外にどのような伝え方があるのかを教師が予測をしておくとともに、状況によっては伝えていくために必要な素材や道具を提示したり環境構成として用意しておいたりすることが必要だと思われる。

<分科会(社会スキル)>

発表者： 広島大学附属福山中・高等学校 山下 雅文, 下前 弘司

テーマ： 「附属福山中・高におけるグローバル人材育成に向けた
実践力・社会スキルの育成」

指導助言者： 広島大学附属学校園研究推進委員 影山 和也(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

広島大学附属東雲小・中学校長 朝倉 淳(広島大学大学院教育学研究科 教授)

広島大学附属三原学校園長 三村 真弓(広島大学大学院教育学研究科 教授)

1 グローバル人材育成に向けての具体的取り組み

附属福山中・高等学校では、平成 24～26 年度、文部科学省研究開発学校の取り組みとして、「持続可能な社会の構築をめざしてクリティカルシンキングを育成する、新教科『現代への視座』を柱にしたすべての教科で取り組む中等教育 教育課程の研究開発」を開発課題とした新たな教育課程を開発した。

新教科「現代への視座」では、複眼的でグローバルな視点を持った問題解決力と読解力を育成するために、「国際化・グローバル化」、「地域・文化」、「安全・健康」、「環境・防災」、「資源・エネルギー」などのテーマを教科横断的に取り扱い、現代社会の諸課題の解決に向けて、クリティカルシンキングを活用して創造的な力を育成し、未来へ創造的な社会をつくらうとする生徒の育成を目標とした。

ESD の視点を取り入れた教育課程を開発するにあたり、国立教育政策研究所の先行研究を参考に検討し、ねらいとする能力・態度を、①批判的、②未来、③多面的・総合的、④コミュニケーション、⑤協力、⑥つながり、⑦参加 に設定して、教科間のつながりや内容の検討を行った。これらで育む能力・態度は、広島大学附属学校園研究推進委員会で整理した「グローバル人材育成」の要素に対応している。

また、学習方法の工夫として右表のように各段階での協働学習を取り入れた。この教育課程による生徒たちへの効果として、「社会的課題などについて主体的に考える姿」や「科学性や論理性に留意した記述や発表」「クリティカルシンキングを『よりよい解決に向けて複眼的に思考し、より深く考えること』であると理解し、議論の場でも、建設的な意見を述べ合ったり、それを受け止めたりする学習集団に成長」が見られ教育課程の有効性が得られた。

高 2・3 年 発展期 現代社会の諸問題を題材に、より高度な議論ができる	形式と内容に関する相互批評活動 グループ討論 文字チャットによる議論
中 3・高 1 年 習得・活用期 互いに適切な質疑応答や指摘ができる	ロールプレイによる問題解決 多面的な相互評価や議論 ディベート 探究活動と発表会・質疑応答
中 1・2 年 入門期 探究や表現活動を行うとともに相互評価を取り入れ、よりよい解決に向けた助言をしあう態度を育成	ルーブリックの作成と相互評価 プレゼンテーションと相互評価 探究活動と相互評価 掲示板による意見交換

しかし、「協力」「参加」「つながり」などに関連する社会スキルの視点からみると、一定の成果が得られたと考えるが、授業の中での協働学習だけでなく、異文化間の「協力」や「つながり」が課題となった。平成 26 年度はこの課題に対して、国際協力研究科のご協力を得て、国際協力や国際的な交流、合意形成を学ぶ講座を行い、実践的な社会スキルの育成を行った。

平成 27 年度からは、これまでの研究開発学校の取り組みをベースにして、より実践力をもつグローバル人材の育成、グローバルリーダー・地方創生リーダーの育成を目標に、文部科学省 スーパーグローバルハイスクール (SGH) の指定を受けた新たな研究開発をはじめた。

当校の SGH は、研究課題「瀬戸内から世界へ！世界から備後へ！ーグローバルイノベーションと合意形成を柱にー」として、Ⅰ 課題研究「グローバルプログラム」による経験知蓄積プログラムの開発、Ⅱ 特別講座「スーパーグローバル」による「合意形成」能力育成プログラムの開発、Ⅲ 新教科「現代への視座」を柱にした認知スキル・社会スキル育成プログラムの開発、Ⅳ グローバルリーダーに求められる資質・能力を評価する評価手法の開発 を中学校、高等学校を通して行う研究開発となっている。

I 課題研究「グローバルプログラム」	II 特別講座「スーパーグローバル」	III 新教科「現代への視座」
第1段階「研究の方法を学ぶ」 中1～高1 総合的な学習	平成27年度試行	中3「防災と資源・エネルギー」
第2段階「解決の技を身につける」 新教科；課題研究への誘い 高1「社会科学分野」 高2「数理情報科学分野」	オーストラリア研修旅行 タイ研修旅行 防災に関する研究と提言 IDEC連携プログラム	高2「クリティカルシンキング」 「グローバル コミュニケーション」
第3段階「研究の実践」 高2, 高3 総合「提言」「創造」		

このように、SGHの指定に伴い新しい教育課程の提案と課題研究の実践を行っている。具体的な取り組みとして本分科会では、異質な集団での協働や問題解決を行うという社会スキルを、普段の授業でいかに育むかに焦点を当て、生徒が主体的に考え、協調する活動をする2つの事例を紹介する。

(1) 中学校3年「防災と資源・エネルギー」での取り組み

資源・エネルギー分野では、中学校理科第7単元「科学技術と人間」に社会科学的内容を盛り込み、エネルギーの利用と社会との関わりなどを学ぶ。その中の「新エネルギーの利用」では、火力、水力、原子力以外のエネルギーの利用の概要を理解させるとともに、風力発電に関連した探究活動「最も発電する羽根はどのようなものか」を全7時間で行い、条件制御などに留意した実験計画の立案や科学的な分析・解釈する能力の育成を図る。また、中間発表会を行い生徒同士の質疑応答を活発に行うことで研究を深めていく。羽根の条件といっても様々な要素が考えられるので、主に調べる条件に関する実験（主テーマ）の他、別の条件を大まかに変化させる実験（副テーマ）を行うことで、実験条件を決めた。副テーマを設定したことで、他の班への意見やアドバイスを引き出すことにもつながった。

この探究実験を踏まえ、地理的、地学的知識も踏まえて自然環境を総合的に捉えて、自然エネルギーの利用のメリット・デメリットなどを考えるとともに、エネルギーの有効利用の視点で日常生活を見直す展開を行った。

(2) 高校1年「課題研究への誘い；社会科学分野」での取り組み

「社会科学分野」では、クリティカルシンキングを実践し、様々な資料を吟味・検証して事象・出来事を論理的に説明できる社会の見方・考え方を獲得させること、そして、「答えのない問いに挑む」展開を図る。そこで、様々な社会問題について利害関係の当事者を想定し、各立場にはどのような正当性があるのかを互いに理解しつつ、合意に向かう学習を設定する。具体的には、生徒自身が地方創生プロジェクトを考える単元「答えが確立していない課題に挑む～地方創生プロジェクトを考える～」を設定した。

単元は全6時間であり、地方自治体の現状、自治体ガバナンス、地方分権の現状などを理解するとともに、班別に担当自治体を決め「地方版総合戦略」などの資料を読み解き、課題を明らかにしてその解決のために、特産物や観光資源など様々な資源を見いだして地域の価値を再発見し、自治体を超えてそれを結合させることなどを通じて新しいビジネスモデル、ブランドの確立を考え、魅力的な町づくりあるいは雇用創出につながるプランを生み出し提案する展開を図る。その際、他の地域との「交渉（negotiation）」を取り入れ、各グループ間での交渉をすすめることで地域がもつ資源を共有し、より広域の問題を解決することにつながるプランを考える。また、作成したプロジェクトの発表を通して、解決目標達成の手段として優れているか、現状分析の不備はないか、といった視点から相互検証を行う。

2 取り組みの成果と課題

上記で例示した2つの事例のように、時間をかけて、「唯一の答えがない（すぐに答えが出ない）課題」に対する協働的な学習を行うことで、クリティカルシンキングを基礎に置いて多面的、総合的に考え、「よりよい解（最適解）」を科学的に求めようとしたり、「建設的な妥協点」を探って粘り強く合意形成をしようとしたりする経験知の蓄積となり社会スキルの育成になると考える。これらの経験知が、将来、異質な集団の中でも活躍できるグローバルリーダーとして必要とされる資質・能力の基礎となると考える。

現在、高校1年の総合的な学習「体験グローバル」で課題研究が進んでいる。また、スーパーグローバルの課題研究も進んでいる状況である。これらの課題研究で、生徒たちがそれぞれの課題を主体的にとらえて取り組み、実社会へ提言していけるかが、最終的な社会スキルの評価につながるであろう。成果が高まるよう、大学の各所のご協力をいただき、生徒たちへの支援を続けていく予定である。

